

道

求



第七號

第十卷

明治四十五年二月十五日發行（每月一回定期發行）

求道第拾卷第七號目次

求道

◎四海兄弟と同一念佛

講話

◎『教行信證』信卷三信釋

第九席

信樂釋（現生正定聚）

前號三續

第十席

欲生釋（如來廻向）

告白

◎俗諦門の重荷をわろして

◎住て見やうなき此の奴が

◎信仰のたより

五 御舊蹟の處々
講話

◎歎異鈔

第十三章

唯圓坊の傳

雜錄

岡野秀一

近角常觀

毎日曜午前九時

求道學舍

（本郷區赤川町一帯地）

毎土曜午後二時

第二求道會

（九段坂佛教俱樂部）

毎月二日午後七時

第三求道會

（日本橋區板橋町説教所）

求道

第十卷
第七號

四海兄弟と同一念佛

曇鸞大師曰く、夫れ遠く通ずるに四海の内皆兄弟と爲す、同一に念佛して別の道なきが故にと、四海兄弟の眞意義は如來の本願には善惡を簡ばす、貴賤を論ぜず、男女老少を謂はず、古今東西を分かつ、唯選擇本願の念佛を以て同一に救済せんと宣へる大寶海に歸入して念佛成佛するにある、世界主義とか、人道主義とか、平等主義とか云ふことは唯漫然として人類なるが故にとか、人間なるが故にとか、同一世界に生ずるが故にとか、萬物同根なるが故にとかいふ様なことは根據がない、單に人種の異同を問はずとか、國土の別を見ずとか、言語、風俗の差別を認めずとか云ふは唯偏見を拂ふばかりで中心を見出すことが出来ぬ、四海兄弟の眞意義は十方衆生と呼びたまへる如來の本願の下に善人も其善の功を認めず、惡人も其惡を懺悔し、如何なる修行も其自力を抛ち、如何なる逆謗も其邪見を翻へし、有學無學を認めず、有罪無罪を問

はず、學ありて何等の力もなく罪亦飽迄恵まれて十方衆生唯如來の本願の下に同一念佛せんとする、是即ち四海兄弟の鹹一味に入るのである、四河海に入りて一味となるが如く、四姓釋と稱して同一佛子となるのである、是佛教の根本義である、然れども佛教は單に四姓の別を見ずといふだけの人間主義ではない、同一涅槃の醍醐味を味はねばならぬ、能發一念喜愛心不斷煩惱得涅槃、凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味である。親鸞聖人は法然上人の選擇本願念佛を嘆じて曰く、明らかに知んぬ、是凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名くるなり、大小の聖人、重輕の惡人皆同じく齊しく、選擇大寶海に歸して念佛成佛すべしと、實に如來の本願の前には大小の聖人も其自力修行の功を認めざるのみならず、全く之を翻へして唯弘誓の力を認むるのである、願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなながら、如來の弘誓に乗ずるなり、如何なる龍樹天親の大師と雖如來の本願弘誓の前には自力の心行を抛ちて、唯大慈大悲を仰ぐばかりである、嘆異鈔に自力作善の人は、ひとへに他力をたのむところかけたるあひた、彌陀の本願にあらず、しかれども自力の心を廻へして他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生を遂ぐるなり、大悲

の御恵みの前には大小の聖人も其善を認むるあたはず、善凡夫も有漏の諸善も其光を消さるゝのである、實に如來の光顯巍々として威神無極の前には日月摩尼、珠光猷明も皆悉く隠蔽して、猶聚墨の如くである、善人猶以て往生を遂ぐといふは、善人が其善が間に合ふて往生を遂ぐるのではない、其善を廻へして、唯御慈悲ばかりで往生を遂ぐるのである、唯念佛ばかりで往生を遂ぐるのである、聖人であらうが、善人であらうが、如來の本願は專修專念である、自力作善が間に合ふ位ならば、選擇本願はいらぬのである、念佛成佛は不必要である、故に如何なる聖道も權假である、如何なる萬行諸善も假門である、像法のとさの智人も、自力の諸教をさしあきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいたりたまふ。龍樹大士も其本意は南無阿彌陀佛である、天親菩薩も其自誓は歸命盡十方無碍光如來である、恒沙塵數の如來は、萬行の少善さうひつゝ、名號不思議の信心を、ひとしくひとへにすゝめしむ、十方恒沙の諸佛の、證誠護念のみことにて、自力の大菩提心の、かなはぬほどはしりぬべし、實に三世の諸の如來出世の正しき本意は唯阿彌陀の不可思議願を説かんとの思召である、是悲願の一乗である、悲願の外に二乗三乗を認めぬのである、二

乘三乗は悲願の一乗に入らしむるためである、此悲願こそ實に第一義乗である、誓願一佛乗である、本願圓頓一乗である、聖道權假の方便に、衆生ひさしくどもまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乗歸命せよと仰せられたのが絶対不二の如來本願の教たる所以である。

親の前には如何なる善き子も自ら誇りとするのではない、如何に親孝行の子も親に對して其孝を誇り得る者はない、又親が子を憐むに其孝たると否とに拘はる事はない、否親に對して孝をなせりと思ふ者あらば根本に誤りて居るのである、如何なる孝子も自己の孝たりと思ふ心あらば之を廻へして親の大慈大悲に感泣すべきである、古の所謂善尙とらず況んや惡をやである、善すら尙何等の效を認めぬのである況んや惡を以て防となさんや、孝子すら親の前には其孝を廻へして大慈大悲を仰ぐ、況んや不孝の輩、其不孝を廻へして大慈大悲を仰がざるべき、孝子すら親は之を憐愍して其孝の功を認めず、況んや不孝の子に對して暫らくも眼を放つべけんや、不孝たるだけ夫だけ捨つることは出來ぬのである、親鸞聖人曰く、初果の聖者尙睡眠懶墮なれども二十九有に至らず、何に況んや十方群生海此行信に歸命し奉れば攝取して捨てたまは

ず、故に阿彌陀佛と名けたてまつる之を他力と曰ふと、又曰く願海は二乗雜善の中下の屍骸を宿さず、何に況んや人天の虛假邪偽の善業、雜善雜心の屍骸を宿さんやと、即ち二乗の善人すら其善を止めず、況んや愚惡の凡夫の惡を轉ぜざるべき、實に歎異鈔に善人なほもて往生を遂ぐ、況んや惡人をやと宣ふ所以である。

選擇集には本凡夫の爲にして兼ては聖人の爲なりと仰せられた、正信偈には本師源空明佛教憐愍善惡凡夫人といひ、一切善惡凡夫人、聞信如來弘誓願といひ、善といふも、惡といふも、結局そらごと、たはごとの煩惱具足火宅無常の凡愚である、しかれども其有漏の善をたのみにして居るも、惡をかなしめるも同様に憐みたまふのである、善導獨明佛正意、終哀定散與逆惡と宣ふも是れである、されど善凡夫ら憐愍したまふのであるから、惡凡夫は最悲哀したまふのである、極惡最下の衆生の爲に極善最上の法を説きたまふのである、實に惡人正機の本願他力の意趣をいたしかねばならぬ、如來會に曰く、彼國の衆生若しは當に生れんもの皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の處に到らしめん、何を以ての故に、若し邪定聚及び不定聚は彼因を建立せることを了知すること能はざるが

故にと、是實に惡人正機の眞體である、歎異鈔に煩惱具足の我等は何れの行にても生死をはなれ、ことあるべからざるを、あはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、ひとへに惡人成佛の爲なれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なりと、是實に彼因を建立したまへる本意である、此の御本意を了知することあたはざる故に、即佛智不思議を信ぜざるゆへに、我等が善きを善しとして邪定聚不定聚の機となるのである、歎異鈔に一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我こそゝろのよくて殺さぬにはあらず、又害せじとおもふとも百人千人を殺すこともあるべしと仰せのさふらひしは、我等がこそゝろのよきをばよしとおもひ、あしきをあしとおもひて本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることを仰せのさふらひしなりとあるが所作の善惡に目がつきて、惡業煩惱の我等を助けたまふ本願の正意をいたかぬことを戒められたのである、宿業の如何によりて所作にあらはるゝと否との區別こそあれ、實に罪惡深重煩惱熾盛の我等、かくの如き曠劫已來常沒常流轉にして無有出離之縁のものゝたすけんとの本願不思議を仰き信ずるの外はない、是實に機法二種の深信である、正定聚の機である、極惡深重の衆

生大慶喜心得て、諸の聖尊の重愛を蒙るのである。

一寸聞くと善惡を簡ばずといふこと、惡人正機といふと、何んとやらん意味の異なる様な點があるらしく感ずることがある、是は善惡を簡ばずといふ事を善くても惡しくても可いといふことと思ひ、惡人正機といふことを惡人程一層可いといふことに誤解するからである、善惡を簡ばずといふは所謂我等が心の善きを善しと思ひ、惡しきを惡しと思ふて居る心を廻へして如來の御思召をいたゞくのが肝要である、其如來の御心といふは我等は實に善といふも惡といふも皆をらごと、たはごとにて、極重惡人、凡愚底下のものなるを、飽までも見捨てたまはざる誓願の不思議である、此不思議を信じたまつてのが往生の正因である、即惡人正機である、彌陀の願には老少善惡の人ををらばれず、唯信心を要とすとしるべし、其故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんが爲の願にてまします、即是である、和讃に不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり、信心の正因うるとは、かたさがなかなになほかたし、かく信ずる一念に實に我身の罪惡を自覺して今まで我身の善きを善しと思ひ惡しきを惡しと思ひたることの間違たることが分かるのである、實に如來の御こゝろによしと思

召すほどにしりとほしたならばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたならばこそあしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみをまことにておはしますとの仰せが實に聖人御自督の極である、全體善惡を簡ばずといふことを善くても惡しくても可いと思ふものゆへ、邪見に陥れば惡人正機といふは惡人程可いといふことに誤解し、之を矯正せんとして、善くても惡しくても可けれど、善くせねばならぬと思ふて自力に陷るのである、不思議の佛智をいたゞきて見れば、今まで善と誇れるも善にあらず、惡を恐るゝも惡と云ふに足らず、眞の惡は罪惡深重煩惱熾盛の我等たることである、眞の善は此の如き罪惡を見捨てたまはざる本願である、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへ、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに、全體善くても可い、惡しくても可いといふ言葉が、猶善くも惡しくも思ひにまかせて出來るとの思が本になつてある、全體是が間違である、惡人程一層可いといふて猶爲すべき惡の餘地あるが如く思ふて

居る、極惡最下のもが此已上に爲すべき惡があるものか、たとひ身に行はぬからとて極惡最下と知らぬが誤である、我等は地獄は必定すみかである、又善くても可いとか、善くせねばならぬといふは全體我等が善く出來ると思ふて居るのが誤りである、世間的に善いとしたところが、夫を善として誇りとして居るが間違である、又夫を爲さんとすれば出來るもの、様に思ふて居るのが間違である、我等が如き極惡最下のもを捨てたまはぬ本願の親心をいたゞく善に比べて見れば善と名けらるべき善はないのである。

聖人最終の法語としての御述懐に、よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しかかはは、おぼそらごとのかたちなり、是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなければ名利に人師をこのむなり、是實に聖人が如來の本願の前に至心信樂已を忘れたまひたるかたちなり、實に如來の本願の前には善もなく、惡もなく、貴賤縋素を簡ばず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、唯彌陀の誓願不思議を信じたまつて念佛し奉るばかりである、實に念佛成佛は眞宗である、同一念佛無別道故である。

聖人が親鸞は弟子一人もたず、其故は我はからひにて人に念佛を申させ候はこそ弟子にても候はめ、ひとへに彌陀の御催にあづかりて、念佛申し候を我弟子と申すときはめたる荒涼のとなりとあるも、皆如來の御弟子なれば親鸞の弟子でないといふに已を空しくしたふのである、法然上人の信心も善信の信心も一つなりと仰せらるゝも同じく如來より賜はりたるからである、隨て唯念佛して彌陀にたすけられ参らすべしとの法然上人の仰が、形を見れば法然上人言をさけば彌陀の直説である、如來の教法を十方衆生にとさかしむる時は唯如來の御代官を申しつるばかりなりといへる謙虛なる態度が、不知不識の間に我等が爲には眞に如來の化現しとして信仰し奉る次第である、本尊聖教は如來の流通物なれば少しも自専したはぬのである、其代り有情群類蠢々の輩まで十方衆生の中なれば如來の大悲を蒙れがしと思召すのである、たとひ食膳に上る魚鳥を見てすら、せめて三世諸佛解脫幢相たる袈裟を着して御縁を空しくせぬ様にとの深き思召である、是實に如來の本願たる十方衆生釋尊の教説たる諸有衆生がやがて信心を通じて自然に顯現したまふのである、此に至りて四海兄弟已上に上りてあらゆる生きとし生けるもの皆如來の御

講義

『教行信證』信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

親心をいたぐべきものである、されど眞の兄弟の名乗りは同一念佛に入りたるときである、大悲の招喚が聞こえた時である、同一鹹味に入りたるときである、故に過去を顧みては過々行信を獲ば遠く宿縁を慶べといひ、未來を望みては一切の有情は皆以て世々生々の父母兄弟なり何れも、此順次生に佛になりて助け候べきなりとある、此の如く三世に通じて十方を貫きあらゆる衆生、大悲召喚の下に唯南無阿彌陀佛と眞の同胞、眞の兄弟を名乗るべきである。

安樂佛國にいたるには

無上寶珠の名號と

眞實信心ひとつにて

無別道故ときたまふ。

如來清淨本願の

無生の生なりければ

本則三三の品なれど

一二しかばることぞなき。

第九席

信樂釋(現生正定聚)

「前號の續き」

そこで今席の『華嚴經』の文の次ぎには

『又言はく、如來は能く永く一切衆生の疑ひを斷たしむ』
 『慈悲聞く一念に、如來は一點の疑ひも無く爲さしめ下さるとであります。又』

『其の心の所樂に隨つて、普く皆な満足せしめんとなり。』
 信仰頂く迄は誰しも世の中が斯くなると善からうと、外界に満足求めて居るのであるけれども、慈悲頂く一念に、其の不足言ふ自分が實に淺聞しき者なる事が知られ、其の者が慈悲一つに満足させて貰ひて、人生に更に不満が無くなつて仕舞ふ。又不思議なもので、斯くなると、外界の事柄迄が總て都合よく運び、満足させて下さるのである。併し茲は何處

迄も内心が主で、設ひ外界に如何なる苦ありても、其の苦が有りながら、其の間に充分満足させて頂く事出来るのであります。

猶ほ茲で序に申しますに、此の『華嚴經』は廣大なる佛境界を説かせ給ひたる經にして、釋尊成道後三七日の間に、廣大なる悟りの境界に在りて、有りとおる佛菩薩が重々無盡に在らせらるゝ蓮華藏界の有様を説き給ひたが此の『華嚴經』である。處が此の『華嚴經』の説法が順次進んだ處に、其の廣大なる佛境界なる蓮華藏界に入る有様を説き給ひたる、所謂「入法界品」がありて、其處に有名なる善財童子求道の事があるのであります。これは私の能く言ふ求道者の模範とも言ふ可きもので、夫れに善財童子が有りとおる人々に遇ひて法を求め、遂に五十三の智識に遇ふたといふ事があるのである。之を一々言ふと、中には盗人につひて道を求めたといふやうの事さへあるのであります。而して其一番最後に五十三番目に普賢菩薩に遇ひ、して普賢菩薩より阿彌陀佛の法を聞きて茲に初めて安立して法界に入つたといふ事になつてある。而して其處に彼の名高き、我面のあたり阿彌陀佛を見奉つて、安樂國土に入つたといふ意味の文があるのであります。して只今拜讀する『華嚴經』の御文は、實に此の「入法界品」の文なのである。斯く茲にも阿彌陀佛の本願念佛と『華嚴經』との關係が伺はれるのである。去りながら親鸞聖人は、「入法界品」の文だからとて、茲に『華嚴經』を引き下されたのでは無い。猶ほ他の所も澤山引きなされてあるのであります。

猶ほ、一つ進んで申すならば、此の『華嚴經』と淨土門との關係は、初めて日本に於て念佛の法門の起つたのが、實に此の『華嚴經』より始まつて居るのである。即ち良忍上人が『華嚴經』の事々無碍と念佛とを一つにして、融通念佛を始めてなされたが、實に日本に於ける念佛宗の始まりである。融通念佛宗に於て、「一即一切佛、一切佛即一佛」と言ひて、一南無阿彌陀佛を稱ふる中に、一切佛は皆な隨つて居ると説くのは、實に此の『華嚴經』の味ひから來るのであります。而して其の良忍上人のたしか孫弟子かと思ふ——孫弟子の法然聖人に至つて、茲に純粹の念佛となつて來たのである。故に歴史的に言へば、法然聖人に至つて、『華嚴經』より出た念佛が、純粹の念佛になつたといふ關係に在るのであります。猶ほ一つ言へば、支那でも念佛と『華嚴經』は非常に近しい關係にあるのである。御存知の如く支那の五臺山は名高き華嚴の道場である。而して念佛は此の五臺山に在つたのである。我が國でも天臺の慈覺大師が入唐して此の五臺山に登り、念佛の法を日本に傳へて、常行三昧の念佛を修せられたといふのである。殊には第一曇鸞大師が其の附近に居られて、毎に五臺山に行きて不思議な出來事に遇はれたといふ事が謂はれて居るのである。で斯く日本に於ても念佛は『華嚴經』より起り、支那に於ても密接な關係が存するのである。猶ほ、一つ言へば『大經』の序文に

佛の華嚴三昧を得て、一切の經典を宣暢し演説す。

との御言葉もあり、猶ほ其邊一體の言葉使ひが總て『華嚴經』の味ひで、斯く發端より『華嚴經』との連絡が見えるので

ある。また其の外

皆な普賢大士の徳に遵ふて、諸の菩薩の無量の行願を具す。

との御文もあり、又二十二の願の中には、

常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。

との御言葉もあり、第一『大經』の文句からしてが、能く『華嚴經』に似て居るのである。已上は此の他力の法門と『華嚴經』との連絡を申したのであります。

處で、夫れならば親鸞聖人は此の意味で『華嚴經』を茲に出しなされたかと言ふに然うては無い。親鸞聖人は、細かき關係に顧着無く、頭から『華嚴經』全體を他力と見てお仕舞ひなされたのである。夫れは何う御覽なされたのであるか。こは私共今より考へて私に然う思はせて貰ふ迄の事でありますも、聖人は先日來お話する此の『信卷』でも初に『涅槃經』を引き、次に『華嚴經』を引き、又『行卷』でも先づ『涅槃經』を引き次に『華嚴經』を引き、殆んど『涅槃經』を引き、次に『華嚴經』を引かるゝが聖人の御さまりになつて居ると言つてもよいのである。何故聖人が『涅槃經』と『華嚴經』とを引きたるかと云ふに、『涅槃經』は釋尊八十御入滅の時に、拔提河畔で阿難を呼びかけ給ひ、

如來の色身は滅すと雖、法身は滅せず、如來は常住にして變易有ること無し。

と、如來の法身常住の涅槃の境界をお説き下された經が、『涅槃經』である。其釋尊のお説き下された涅槃の如來の境界は、即ち我々が此世の因縁盡きて淨土に參らせて貰ふと到らせて貰ふ所の涅槃の極果である。夫れなれば又『華嚴經』の方は何

舞ふのであります。

二二

そこで若し『華嚴經』の當り前の讀み方よりすると、茲に一輪の花咲いてあるは、之も毗盧遮那法身が現はれ下された姿であるといふやうの事になるかも知れぬ。去りながら他力より言ふ時は、他力は今言ふ往還二種廻向共に、遣る瀬無き阿彌陀佛の本願なれば、何頂くも、此の罪深き私を見捨て給はざる親心を頂かさうとの、大悲の御手廻はしと頂く外無いとなるのである。で他力は廣く言へば、今言ふ極まりなき釋尊一代の説法が、南無阿彌陀佛の一つで頂けるのである。廣大なる往還二種廻向の御哀みが、頂く處は南無阿彌陀佛の一つで與へらるゝのである。去りながら其の頂く處は南無阿彌陀佛の外無いといふ處を、餘程注意仕無ければならぬのであります。之は先きいふ『華嚴經』善財童子の事につき申しても、如何にも我々も人生種々の出來事に遇ひ、種々なる方面よりお手引きを蒙るのである。けれども其御手引きは夫れによりて我々罪深き者が、此者をお見捨て無き大悲を知らせて頂きたといふ事にて、若し茲でも手引きが直ぐ慈悲ぢや、となつたら大變な間違ひに墮するのである。現に昨日も或方は盜難に遇ひ何も彼も皆な取られて仕舞つた、——其方は夫れ迄家庭問題で惱んで居られたのであるが、處が其盜難に遇ひ何も彼も皆な取られてがらりと無くなり、其の時如何にも當てにならぬ世の中ぢやと一念思ふたら、同時に自分如き惡しき者をお見捨て無き慈悲なる事が有難くなり、今迄の苦しみも何も無くなつて仕舞うたと話された。之は如何にも遣る瀬無きお

うかと言ひますに、『華嚴經』に釋尊が、有らゆる世界有らゆる處に、文殊普賢等の無數の諸佛が、或は日月星宿の如く、或は百花の爛熳たる如く、重々無盡に現はれて下さるとお説き下されたる、其の『華嚴經』の蓮華藏世界の有様は、即ち『正信偈』に

蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身を證せしむ。煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の菌に入つて應化を示すといへり。

無量々々の諸佛が法性界より姿を現はし、煩惱の林、生死の菌に遊戲して、我々をお導き下さる還相廻向の有様となるのである。即ち先き言ふ『涅槃經』の方は、我々が廣大のお恵みを頂いて淨土に參らせ貰ひ、得させて頂く處の眞如法性の涅槃の味ひをお示しなされたとなり、之は往相の廻向になる。こは『和讃』に

往相の廻向とてくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行をしむれば、生死すなはち涅槃なり。

又『華嚴經』の方は、其の廣大なる境界より、無量無數の諸佛が現はれ我々をお導き下さる姿となり、還相廻向の有様となるのである。之は『和讃』には、

還相の廻向とてくことは、利他教化の果をしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の徳を修するなり。

斯く親鸞聖人のお示しより頂くと、廣大なる『涅槃經』『華嚴經』も、全く往還二種廻向の味ひの外無くなつて仕舞ふのである。否な『涅槃經』『華嚴經』ばかりで無く、釋尊一代の教説が親鸞聖人の思召よりすると、往還二種廻向の外無くなつて仕

心が、人生の事々物々の上に顯はれて、我々を廣大なる慈悲にお手引きをなし下されるのである。去りながら其のお手引きてお知らせを蒙るなり、頂く處は何を頂くかといふに、此の罪深き「うそ」「偽はり」の私を、能くも——夫れ程迄もお見捨てなき慈悲の有難やと、茲一つを知らせて頂くとなるのである。で其の之を知らせて下さる迄は、之を知らせる爲めのお手引きとして、人生の色々の出來事がある。去りながら出來事其の物は矢張り人生罪惡の出來事で、之を直ぐに慈悲と言ふ時は、罪惡の人生といふ事と、忽ちハダ々々になるのであります。之は聖人の『和讃』にも

彌陀釋迦方便して、阿難目連富樓那韋提、

達多闍王頻婆娑羅、耆婆月光行雨等、

大聖おの／＼もろともに、凡愚底下のつみひとを、

逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。

方便は、我々凡愚底下の罪びとを、逆惡もらさぬ誓願に方便引入せしむる爲めの御導きである。で我々今日迄、長々此の廣大なる御導きを蒙りし事を思へば、

いかばかり御手間か、りし菊の花

實に無量々々の有縁の人達、無量々々の諸佛菩薩は、長々有らゆる出來事の陰につき添うて私をお導き下され、而して其結局の知らせて頂く處は、法師法皇なる阿彌陀佛のお慈悲の外に無い。『和讃』には

智度論にのたまはく、

菩薩は法臣としたまひて、尊重すべきは世尊なり。

其の法師法皇なる阿彌陀佛のお慈悲を一念有難いと頂くな

り、何も諸佛菩薩や外界の出来事に、一々感謝するに及ばぬ。

諸佛の護念證誠は、

悲願成就のゆへなれば、

金剛心をえんひとは、

彌陀の感恩報すべし。

唯南無阿彌陀佛々々と、廣大なる大悲の御恩を喜ばせて貰ふ。すると

心だにまことの道にかなひなば

祈らずとも神や護らん。

其南無阿彌陀佛を喜ぶ者を、一切の諸佛菩薩は言ふに及ばず、有らゆる諸天善神も皆な喜び護り下さるとなる。此の事を他力のお慈悲の上より頂くが、何より肝腎となるのであります。さて斯くの如く頂けば、『華嚴經』に説かれてある一々の事柄は、他力の信仰上より現はるゝ味ひを、『華嚴經』に書かれてある事となる。すれば茲の處に長々しき御文が、皆な一々他力の上より味はるゝ御言葉故、其の積りて銘々に御熟讀あらん事を希望致します。此の意味で御覽になれば、一々申さずとも各自の信念上より充分頂かれる御言葉故、一々の文に就きて申す事は、余り煩雜でもあり、略する事と致します。

(第二回求道會第六日第壹席)

第拾席

欲生釋(如來廻向)

次言欲生者、則是如來招喚諸有群生之救

につきお示し下された趣きは、之れ迄繰返し／＼お話したのであります。今席も又此の三信の筋合ひから申さうと思ひます。既に再々お話した如く、至心の佛の眞實は何かといふに我々日常生活に於て、人にも眞實が無ければ、自分にもまこととする事が出来無い。而して其の爲め我々人も、日夜言ひて見やう無く苦しんで居る有様を、不可思議兆載永劫の長き間、廣大なる眞實を以て、哀はれと眺めて居て下さる、この佛の眞實であります。して其の眞實は何かとなるに、既に前にも申した事でありましたが、茲に一杯の水があり、其の水は綺麗に澄み渡つたる清浄な水である。而して其の清浄の水は即ちなみ／＼と漂えて何時でも溢れんとする水である如く、其の佛の清浄眞實は即ち我々煩惱闇黒の者を飽く迄見捨てぬとある溢るゝ信樂のお慈悲である。而して其の信樂の慈悲は、即ち溢るゝ泉は、まる／＼此方に吞まざるといふ水である如く、全く佛の方より私に差し向け、與へて下さるお慈悲である處が、次ぎの欲生となるのであります。て今席の欲生釋に於ては、初めに

『次に欲生と言ふは、則ち是れ如來諸有の群生を招喚したまふ救命なり。即ち眞實の信樂を以て、欲生の體とするなり。』

欲生といふは、如來の方より我々諸有の群生に、極樂に生れんと欲へと、先き呼びかけて下さる救命である。而して其のお意は、私が哀れ捨てられぬとの、遣る瀬無き大悲のお心に外無ければ、眞實の信樂を以て其の體とする、とてあります。そこで斯く至心信樂欲生の三つは、別物で無い、今言ふ

命。即以眞實信樂爲欲生體也。誠是非

大小凡聖定散自力之回向故各不廻向也。

然微塵界有情流轉煩惱海、漂沒生死海、無

眞實回向心、無清淨回向心。是故如來矜哀

一切苦惱群生海、行菩薩行時、三業所修乃

至一念一刹那回向心爲首得成就大悲

心故、以利他眞實欲生心、回施諸有海。欲

生即是回向心。斯則大悲心故疑益無雜。

前席に於ては大分細かな話を仕たのでありますが、要するに信心の眞の味ひを申し述べ度いと思つたからであります。て要する所他力信仰に於ては、佛の遣る瀬無きお心を一念知らせて頂いた時、やれ難有やと信心歡喜の思ひが起る。其の遣る瀬無きお心とは、我々善いにつけ惡しきにつけ種々無量の計らひを起し惱んで居る者を、其の者を哀れと思召し、救はんと誓ひ給ひし大悲眞實の御意であります。て他力に於ては此の廣大の御意を頂く外に、何物も無い。今皆さんが此の講義をお聞き下さるにしても、講本に書いてある意味合ひを知らるゝことが肝腎にあらず。此の講義を縁として、此の廣大なるお慈悲一つを頂いて下されば、最早や申すことは無いのであります。

さて親鸞聖人が、佛の廣大なる至心信樂欲生の三信の味ひ

清浄なる水は、即ちなみ／＼と溢るゝ水であり、溢るゝ水は即ち私に吞まざる水である如く、我々五分々々の世の中に、斯く互に隔ての止まぬ夫れが可哀相て堪えらぬとあるが、あなたの至心のまことである。而して其のまことは惡しければ惡しき者程捨てられぬといふ信樂の慈悲、其の慈悲は向ふ様よりまる／＼此方に蒙らしめて下さる欲生となるのである。て我々に此方は何程聞いても頂かれず喜ばれぬ仕やうの無き者であるが、其の者が可哀相であると向ふ様より與へて下さる此の欲生のお慈悲故、遂に此は頂く外無くなるのである。之が廻向といふことなのであります。て「親鸞聖人の眞宗は廻向である」「向ふより下さる救である」といふは、此方より手を出すで無しに、此方は淺間しく迷ふて居る者を、佛の方より呼びかけて、其の者に向ふより廣大のお恵みを加へて下さるといふ、茲の處に當り前ならぬ思ひがけ無き處がある。之れなればこそ、我々お慈悲が頂かせ貰へるのであります。

二

夫れ故親鸞聖人、茲の處のお示し方が實に、ひどいのであります。即ち次ぎには

『誠に是れ大小凡聖定散自力の廻向に非ず。故に不廻向と名る也』

こゝ甚だ大切であります。先づ「不廻向と名るなり」親鸞聖人の淨土眞宗は不廻向の宗旨である、といふは何か。入らぬ事を申しますも、廻向不廻向對なることが、『撰集』二行

章にあるのであります。夫れは何うあるかといふに、己に善導大師も

南無と言ふは即ち是れ歸命、亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に必ず往生を得。

と仰せられ、南無阿彌陀佛々々と稱ふる念佛には、既に廻向の義が具足してあるのである。故に此念佛を稱ふる者は、別に此方より廻向を用ゐる無くともよい。然るに余行余善に於ては必ず廻向を必用とする。それは余宗にありては

願はくば斯の功德を以て、普く一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん。

と、己が行ずる處の善根を總て此方より廻向して佛果に向ふ意であつて、即ち余宗によりては廻向は此方より向うに廻らし向ける意味である。爾るに念佛には斯く初めから廻向の義が具はつてある故、別に廻向を用ゐること入らぬ。故に余宗は廻向であるも、念佛は不廻向であると、之が不廻向なる言葉の出たものとあり。處が親鸞聖人になると、不廻向は、念佛に廻向が入る入らぬ位のことと無い。何故不廻向かといふに、もとゝ念佛は佛より御廻向の法である。佛より下され物親よりの賜はり物なのである。親より金を貰うて居りながら、其金で親に土産を買うて差上げますといふ法は無い。故に念佛は、大悲より下され物であるが故に佛よりは廻向、此方よりは不廻向であると、茲でさつぱり南無阿彌陀佛は如來廻向といふ事になり、此方より差し向けるて無いとなつたのであります。

三

そこで前席前々席にていふ、我々此方より慈悲を喜び度い、信心を頂き度いは、之れ皆な此方より佛に向ふこととなり、此方より廻向の意味となるのであります。處が斯く他力は、如來より御廻向の法であつて見れば、我々此方より五分々々て佛に向ふ法で無い。我々此方より佛に向ひ、御信心下さいて、五分々々てやるのでは、いつ迄やつても駄目となるのであります。そこで斯く他力のお恵みは、如何なる者と雖、此方の自分の力で何う斯うなる法で無い。故に『誠に知んぬ、大小凡聖定散自力の廻向に非ず』——大乗小乗の凡夫はもとより、如何なる智者聖者と雖、又定散——定散は定は眞想により心に思ひを凝らして佛に向ふものであり、又散は自力々行によりて佛に向ふ者である。其の如何なる種類の者と雖、自から行ふ此方の行て何う斯うなる信心に非ず。故に不廻向と名くるなり。すれば我々信心は此方の方より得度い頂き度いと自分の方より佛に向ひて得らるゝにあらず。佛の方より「其の私を待ち受くる、汝の心中を能く知り抜いて居る、而して其の汝の爲めに飽く迄見捨てず、飽く迄善く仕てとらせ親である」とある佛の仰せ一つを、頂く外無いといふが、茲なのであります。

然るに其の我々の方は何うかといふに、次には、

『然るに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂没して、眞實の廻向心無し。清淨の廻向心無し。』

我々一切の有情は、煩惱生死の海に沈没して、清淨眞實の廻

向心、一點も有ること無い、とてあります。之れは我々五分々々に日暮しをなし、人と互に隔て互に惡心を起す時、自分の方より善くするとよいがとは知れども、自分の方より善くする事は、一分一厘でも出来ぬのである、百も二百も承知仕ながらも、夫れが何うしても出来ぬのであります。又信心の事にしても、何うかして佛を信じ度い、慈悲が分るやうになり度い——て苦しみながらも、何うしても到れぬのである、私など實に此の爲めに苦しんだのであります。夫れ故「眞實の廻向心無し、清淨の廻向心無し」とは、我々人に對して親切心が無い、人に物やる心が無いことぢやなど、そのやうな淺い事に考えて居ては分らぬのである。全體我々が人に對し善くするといふは、向ふが自分に對し、善くするところなのである。向ふは設え如何なる考で自分に向はうと、自分の方より飽くまで善く出来るかといふに出来ぬのであります。夫れ故人間は最後になると、何うしても自分の方よりは善く出来なくなる。故に仕舞ひには、自分の方よりは何うしても善く出来ぬ故、此の出来ざる自分を、誰か人より善く仕て貰ひ度い、といふやうの事になる。私が實に之であつたのであります。昨日も或方が言はるゝには、自分は「一つ／＼手も足もがれて、何一つ出来なくなつた。さうながら出来ぬが出来ぬで放つて置けぬ。此の出来ざる自分を、其の出来ぬ處が實に可哀相である。その善くなれぬ處が哀はれてであると、向うより其の出来ざる處を了解して、優さしく仕て呉るゝ人あらば、如何に嬉しからう」と言はれた。處が、「其の出来ざる處が可哀相である、惡心の止まぬ汝が哀れてある、如何にしても慈悲の

頂けぬ汝を不便に思ふ」と、向ふより遣る瀬無き思ひをもて、向うて下さるが大悲の親の仰せなのであります。然るに我々此の親の仰せを頂く事をせず、之を人生にばかり求め「誰か向ふより然う言うて呉れるとよいが」然う仕て呉るゝ人あればよいが」と言うて居る、信仰問題にしてからが、此の佛の仰せを向ふに置いて、其の慈悲が頂けるとよいがと、此方より佛に向つて居る故頂けぬのであります。爾るに其の頂けざる仕て見やうの無き者に對し佛の遣る瀬無き御心を聞かせて貰ふと、即ち次に

『是の故に如來一切苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一刹那も、廻向心を首として、大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他眞實の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり。』

其の自分の力では一分一厘仕て見やうなき者である故に、佛は此の苦惱の一切群生海を矜哀して下されて——我々信仰求めるいふのが決して善い事を仕て居るので無い。矢張り苦しみ惱んで居るのである。少しも善いこと無いのであります。て佛はこの苦惱の群生を哀れみまし——て、菩薩の行を行じ給ひし時、身口意の三業の所修一念一刹那も廻向心を首として、大悲心をば御成就下された。即ち佛因中にまし——て衆生の有様を御覽下された時「あゝあんな事を仕て居るが」あゝあのやうな事思ふて居るが「之を早く知らせ度い」之を早く届け度い」と、一念一刹那も廻向心を首として、あなたの大悲心をば御成就下されたのである。斯く佛の慈悲は、見捨てぬ大悲を、さあ遣らう——の心より御成就下されたの

であるから、「利他眞實の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり」とあります。さて斯く遣る瀬無き廻向心を以て佛の方より向うて下さるは何か。此方が眞實の廻向心無き奴であるからである。此方が眞實御信心頂き度いなどいふ心の無い奴であるからである。我々の信心頂き度いは、信心といふ美はしき玉を欲しいといふのである。我々の極樂に生れ度いは、眞實淨土を欣求するて無く、死後らくな處に行き度いといふ事である。然るに斯の逼り廻れる私を、夫れ程迄に助けねばならぬと、廣大の廻向心を以て向うて下さる佛にてまします。何人も此の廣大の御親切に氣がつく時は、我が身の惡しきにあやまり果て、慈悲の深さに頭が下らざるを得ぬ、茲で其の心が此方に届くとなるのであります。次に

『欲生は即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に疑蓋難ること無し。』

極樂に生れんと欲へと呼びかけ下さる欲生心は、即ち是れ佛より差向けて下さる廻向心である。斯れ則ち衆生が可哀さうとある遣る瀬無き大悲のお意に外なければ、此のお意に一分一厘疑蓋の難るといふことは無い。所謂無蓋の大悲といふが之である。一分一厘疑ひや障りの無い大悲のお意に外ならぬとであります。

四

さて、其處で此の廻向心を能く頂いて頂き度いのであります。昨日も或方が言はれるには「私なども長らく此の氣持ちがあつたのであるが、」先日來度々多くの人の入信の経過や喜ばるゝ有様を見るに、煩悶仕無ければ何うも信仰には

入れぬやうである。或は自分なども、彌々死ぬとなつたら、信心に入れやうかとの思ひがある」と話された。こは實に最も現に私なども煩悶して信仰に入つたのであります。何故煩悶の時信仰に入り易いかと言ひますに、煩悶すると人生に餘地が無くなる爲めである。煩悶せぬ時は人間は、俺はまだよい事が出来る、まだ自分には多少の名譽があると思つて居るのであるけれども、一度び煩悶に陥ると夫れが皆な無くなつて仕舞ふ。彌々死ぬとなると、今迄頼みあつた妻子も財寶も何んにもなくなつて仕舞ふ。其處へ其の者を見捨てぬとのお慈悲を聞くの故、頂かずに居る場所が無くなるからであります。然るに平日は、頂かうか捨てやうかとの餘地があるから頂けぬ。自分はまだ十年や二十年は、之てやつて行けるだらう。何か非常な苦しみに衝き當つたら、自分も頂けるだらう」と、餘地があるから頂けぬのである。『救異鈔』の御言葉には

何れの行も及びがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし。煩悶すると其の何れの行も及びがたくなつて仕舞ふ。其處へ斯る者を見捨て無き廣大のお慈悲なることを聞くもの故直に頂けるのである。一度び餘地が無くなると、人生は總て駄目になつて仕舞ふ。だから其處で頂けるのであります。去りながら、然らば無くては頂けぬと、思ふのは、大なる間違ひなのであります。全體我々が今頂けぬといふのは、自分はまだ健康である、苦しんで居ない、との餘地があるからである。併し其の餘地なるものが甚だ怪しい、頼む可らざる餘地を頼みに仕て居るのである。全體我々が今健康である

といふ其の健康が、何時死ぬかも知れぬ健康で、矢張り死に迫つて居ると同じ危うさなのである。又自分は今煩悶せぬかで、人の煩悶するのを聞けば、矢張り自分も同やうに苦しむ可き丈の種は充分持つて居るのである。持ちながら煩悶せず居るのだから、却つてあぶない、苦しめぬ方が却つて間違つて居るのである。さりながら何程間違ひと言はれても、現に自分が然うなれぬのだから仕方が無いと言はるゝ。之も實に尤もであります。然らば其心の餘地が如何にして取れるかと言ふに、取らうと自分に苦しんで取れるので無い。設ひ如何に吞氣にありても、其吞氣が決して確かな人生の當てにすべき事にあらず、實に危き爆裂彈を平氣で懷中に抱いて居るあぶなさである事を、夫れを彌々平日の何時によりて氣づかせて貰ふかと言ひますに、實に今の佛の呼び聲、御催促、善知識の言葉の下に、汝平氣で過して居るも、其の平氣の裏に斯くの如き危ぶなさがあるぞ、其心の中には斯くの如き惡しきものが隠れてあるぞ。夫れに對し我は之れ程迄に涙を流し心配して居る、此の佛の心を汝何と思ふか。との遣る瀬無き大悲の仰せが、此方に迫り、遂に此方が頂かずに居れなくなるのである。茲は非常に大切な處なのであります。爾るに我々は、此の佛の遣る瀬無き仰せを頂く事をせず、却つて煩悶でもしたら信仰に入れやうか、一層病氣にでもなれば信仰に入れやうかと、甚しきは夫を自ら企てやうとする人さへある。佛より御覽下さると、其の煩悶無いと思ふて居るのが第一あぶなくて仕やうが無い。寧ろ其の吞氣が此の上も無き罪惡なのであります。

五

之に就き昨年此の求道會を企てた節は、猶ほ故大草惠實師は存命して下され、報恩寺藏聖人御眞筆の『御本書』を拜觀するを得たも、全く同師のお力である。昨年淺草に於ける『御本書』拜觀の席には病中ながら列席して下され、席上御挨拶下されたる御言葉は、御同やう身に泌みて今猶ほ耳底に残つて居る次第であります。其の大草師が病中信仰入られた時私の話した事が矢張り丁度今の處である。一日私が大草師とお慈悲を話した時同師の言はるゝには、「自分は病氣で何時知れぬ身であるけれども、夫れでも明日とは思てやせぬぜ」と、言はれた。之は如何なる病人でも、自分の危篤を今と思ふて居る者は一人も無いのである。病氣になつても、誰も彌々死ぬるとはおもてやせぬのである。之は人間の横着な性分で、夫れ故健康の者がまだ／＼と思ふて居るのも、矢張り之れと同じである。人間はどのやうな危篤に迫つても、まだ／＼と思ふて居るものなのであります。て其の時大草氏は誠に輕妙な喩えを言はれた。丁度道樂息子が、何れ親の處に歸らんならんと思ひながら、まだ残りの金があるから、當分費つて居れと言ふのと同じである」と。之は健康の者でも御信心を得なくともよいと思つて居る者は一人も無い。而も、病氣でも仕たらと突きやつて居るのである。況や病氣になつた者は、何れ信仰を頂かんならぬ、是非信心が欲しいと思ひながらも、而も今と取り詰めて思はぬ。彌々駄目と詰つたら其の時は頂けやうと姑息に一日々々と押しやつて居るのである。其の様は恰も道樂息子が、此のやうに金使ひしては親に

濟まぬと心に思ひながらも、まあ此の金の残つて居る間は使つて居て、彌々金が無くなり、生命が畢るとなつたら、其の時は親の處に行かうと押しやつて居る日暮してあります。去りながら人間は、彌々今死が迫つて來たと思ふものならよけれども、死ぬ迄人間はそんな事思ふものは一人も無い。すれば何處で驚きを立て頂けるのであるか。彌々金が無くなりてから頂けるのでは無い。すれば、まだ、金が有るからと金使ひをなし、まだ、壽命あるからと、一日々々突きやつて居る其の日暮しの餘地は何處で無くのであるか。茲が實に肝腎であります。斯く愚かなる日暮しを仕て居る中に、遂に堪え切れずして親の方が此方に來て仕舞はれた。して言はるゝには「汝何を愚圖々々して居るか、我は久しく汝を待つに汝は何故歸り來らぬか。此の金を使つて仕舞うたら歸らうなど」とは、何言ふてゐるのである。ちつとは其の爲め夜の目も合はず心配して居る親の身にもなつて呉れ。親は汝がもう歸るか、かと、毎夜々々汝一人を一子の如く待ち兼ね、待ちわびて居るのである。夫れに親の心も知らず、まあ當分は斯うしてやれやうなどは、何言うてゐるのであるか、早く自分の心を了解して呉れ、早く自分の思ひを受取つて呉れ」と、直き、私に迫つて下されたが、即ち如來の廻向心なのであります。然るに夫れを或人は、此方より頂く信心ならば、まだ得られやうもあらふけれど、向うより下さる如來廻向の信心故、時節來る迄は、手を空しくして待つより仕やうが無いと歎かれる。否な如來の方は、此方より然ういふ風に言ふもの故彌々待ち兼ねたまゝなく、「夫れ故之れ程迄に此方より言ふ

つは夫れ故平日あれ程話したのであるけれども、師は遂に聞かれなかつた。故に今話しても又駄目ならんとの考があつたからであります。

六

處が其の日辭して歸らうとするに當り、師の御夫人より私は頼まれた。其御夫人なる方も其しばらく前、師と同時に病床にあり、病中信仰に入られた方なのであります。夫人が私に言はるゝには、「主人も此頃大分慈悲を求め、頻りに骨折りて居る様子である、けれどもまだ何うも少しの處が安神がつきかぬ模様である。つきては病床始終あなたの本を読み、あなたの事を褒めて居るのであるから、何うかあなたから眞實の安心を與へて頂きたらよからうと思ふ。實は此頃大分病勢も悪しく、此の間も、自分の生命も來年御遠慮迄かな」と自分で言はるゝから、私も「來年御遠慮迄生き長らへれば結構であるも、御遠慮迄待た無いかも知れぬ、待たない時は何うなさる」と話して居た程である。然ういふ次第故、今度來た時は、是非思ひ切つて話して下さい」と實に手を合はさぬばかりに切實なる御依頼を受けたのであります。私は之を聞く心上の事を思はるゝ。爾るに第一に言ふべき私が今迄言はずに居たは實に申譯けが無いと、其の日は念佛稱へ、歸宅致し、翌朝早速又飛んで行つたのであります。して師に向ひ申したには、「實に私は長らく濟まなかつた、實は私はあなたに多年非常な御世話になり、若しあなたが長く存命して信仰上より法の爲めお働下さるならば、及ばずながら自分も一緒

のに、之れ程待ち兼ねる親の心を、何うか健康な中に頂いて呉れ」と、言はるゝのである。親の御心にする時は、金が無くなる迄放つて置いては親心として案ぜらるゝ。何うか金の無くならぬ中に今の中に頂いて呉れ」と、であります。斯く之れ程迄の絶大なる親切をもち、親の方より面の當り迫まられた時は、如何に横着なる我々も、夫れ程迄に此の身一人の行く末を思召しての親心かと、頂かずに居る餘地無くなる。「あゝ長々待ち兼ねさせ奉りし事の申譯けなさ」と、即ち平日の時善知識の言葉の下に、斯く一念有難やと頂かれた處が、眞實の信心である。即ち頂けるは斯く迄に遣る瀬無く迫りて下さる如來廻向によりて初めて頂かれるのであります。

そこで其の時此の趣きを、私は大草師にお話して、師も大に喜んで下さるのであります。けれども、併し此の時は何うもまだ充分適切に通じ兼ねるやうの感じがあつた。で此の時私の思ふたは、夫れは多年に渡る大草師と私との間柄であります。私は學校を出て社會に立つに至る迄、一方ならぬ同師の御世話を受けた。而して久しき間宗教上の仕事も、共に一緒に働かせて貰つて居つたのである。で平日より信仰上の事も共に話して居つたのでありますけれども、何分立場が信仰で無いもの故、何うも私の考えを充分理解して貰へぬ。故に近來私よりは餘り多くを話さずに居たのである。然るに師は遂に病氣になられた。で茲ぞ私より飛んで行き、「何うか此のお慈悲を頂いて下され」と、出なくてはならぬ處なのである。爾るに夫れを實際私は遣りて居るかといふに、遣りて居ぬ。夫れは御病氣の折柄人情として言ひづらさが一つと、又一

にと今日迄思つて居つた事である。併しながら今は、あなたは御病氣で、今晚にも知れぬ身體を抱えてお出でになるとすると、もう私の取り得は、此の廣大のお慈悲一つをお知らせする外に無い。然るに今日迄、之を言はなかつたは、實に申譯け無く、濟まぬ事でありませう。就きてはあなたに「まだ今明日とは思はぬ」と言はるゝも、今明日とは思はぬと言はるゝ處が實に大騒動の點である。若しあなたが大悲の親様が待ち受けて下さるといふ事を、今生にてたしかに頂いといて下さらずば、彌々時來る時は、之れ限り永劫の別れとなる譯けにて、實に残念の至りである。聖覺法印の『唯信鈔』の仰せにも、

今生夢の中の契をしるべとして、末世のさとりへの縁を結ばんとなり。我あくれなば人に導かれん、我先きだゝば人を導かん。生々に善友となりて佛道を修せしめ、世々に智識となりて、ともに迷執をたゝん。

とありて、前生より定まれる約束とあれば、いつ何時此の世のお別れになるかも知れぬ。去りながら、設ひ何時生死所を異にするも、御信心さへ頂いて置いて下されば、一緒に在るも矢張り同じである。斯く申すも、私が現に此の待ち兼ね給ふお慈悲一つで安心させて貰うて居る事故、あなたにも同様頂きて欲しいと思ふのであります。御同様に此のお慈悲一つに安心したる上ならば、何時生死所を異にするも、今の聖覺法印の言葉通り「我あくれなば人に導かれん、我先きだゝば人を導かん」である。あなたも其上から此の世の壽命畢りたら、極樂に行かれ、私を待ち受けて居て下さい。併しながら

ら斯く言ふ私が、今晚にも何うなるか計られぬのである。其のときは私が先き参りて、あなたをお待ち受けするばかりである。故に何うかあなたも此の廣大なる慈悲をお頂き下さい。私が今ある心中を殘らず打出せば、先づ此の通りであります」と語りた。すると大草師も此の時今迄とは様子が變はりて、「あゝ君能く言うて呉れた。實に難有い、能く分つた。今迄信心決定とは、何か攫えて決定と思つて居たもの故、いつ決定の時が来るかと思つて居たに、實に有難い」と、卓を叩いて喜んで下されて、もう夫れからは何度お遇ひしても、分らぬとは言はれ無つた。併し師は其後も常に人に對し、「俺はまだ信心など頂いて居ぬぞ」と言はれたといふは、之は師が法の事を輕々しく言はず、非常に大切にする人であつたからであります。

さて以上は故大草師が喜ばれた道行きを話したのでありますが、實に斯くの如く、信心は此方より佛に向ひ、「何うかお慈悲を仰ぎ度い、信心を頂き度い、決定の時節はいつあるか」では、何うしても得られぬのである。で先き程も申す如く或人は、私が此の如來御廻向の趣きを話したら、「自分より頂くなればまだ頂きやうもあらうけれど、向ふより御廻向では、いつ下される事か」と、泣いて歎かれた方があつた。夫れは廻向といふ事を、何か氣まぎれに佛が物下される事のやうに思ふて居るからである。處が此方がそんな事思つて居る奴故、佛のお心は彌々ひと通りで無い。今氣がつくか」と待ち兼ねて、在るにも在られず延び上つて待つて、下さるお姿が、立束即行の佛の御立姿である。其の遣る瀬無きお心で向うて下さ

るもの故遂に此方の目が醒め頂ける處が、如來廻向といふ事なのであります。

七

さて之より次に移り

是以本願欲生心成就文經言 至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉。唯除五逆、誹謗

正法、已上。

又言、歡喜愛樂、所有善根廻向、願生無量壽國者、隨願皆生、得不退轉、乃至无上正等菩提。除五無間、誹謗正法及謗聖者、已上。

こはいつもの如く、初めは『大經』、次ぎは『大經』の異譯『如來會』の中より、本願の文を引用して、如來の本願は大悲廻向なる趣きをお知らせ下されたのである。而して茲なる文は兼ねて信樂釋にて申した願成就の御文の前半は信樂釋に入れ、後半を茲にお出し下されたのである。之等から頂いても欲生の廻向心の體、即ち信樂のお慈悲に外ならぬ味ひが、よく頂けるのであります。

八

次ぎは『淨土論』の御文をお引きなされて、

淨土論曰。云何廻向。不捨一切苦惱衆生、

心常作願 回向爲首得 成就大悲心故

廻向有二種相、一者往相、二者還相。往相者、

以己功德廻施一切衆生、作願共往生。彼阿

彌陀如來安樂淨土、還相者、生彼土已、得奢摩

他毗婆舍那方便力成就、回入生死稠林教化

一切衆生、共向佛土、若往若還、皆爲拔

衆生、渡生死海。是故言回向爲首得成就大悲

心故、已上。

こは「大悲心を成就することを得たまへるが故に」とのたまへり」迄が天親菩薩の『淨土論』の御文にして、爾下は其の文意を明にする爲め、曇鸞大師の『註論』の御文をお挙げ下されたのであります。而して御覽の如く、茲でも親鸞聖人は、回向するの文字を、「廻向したまへる」と讀ませ給ひてある。之は一體から言ふと、『淨土論』の上では廻向の文字を如來廻向には讀めぬ。寧ろ衆生より廻向するの意味にとるのが當り前の讀み方である。然るに他力といふ上より言ふ時は、他力とは他なる佛より遣る瀬なきお力を加えて下さるといふ事にて、既に一度申せし如く、曇鸞大師の『論註』の上には、「佛より言ふ時は利他である、他を利益するのである」といふ所謂他利々他の御教化なるものがある。親鸞聖人は深く此のお示しに着眼あらせられて、即ち『證卷』でも喜びの御言葉には、

爾れば大聖の眞言、誠に知れぬ。大涅槃を證することは願力の廻向に藉りてなり。還相の利益は利他の正意を顯はす。是れを以て論主は廣大無碍の一心を宣布して、普偏く難染堪忍の群萌を開化し、宗師は大悲往還の廻向を顯示して、懇勤に他利利他の深義を弘宣したまへり。仰て奉持す可し、特に頂戴す可し矣。

其の御教化からいふと何うしても茲の廻向は、如來より作願して下さる願力廻向で無ければならぬのである。故に聖人は之を如來廻向に讀み、往相還相皆な佛よりの願力廻向であると言はれたが、實に茲の御文より出て来るのである。淨土眞宗の骨目は實に之れで無くてはならぬのであります。爾るに近頃の人のいふ回向は、大低唯廻向丈けてあつて、願力といふ力がついて居無い。こは大に氣をつく可き處であります。そこで御文に就いて申せば、『云何か廻向したまへる』――佛の廻向は何う廻向して下されたのかと言ふに、「一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまへるが故に」とのたまへり――茲は『和讃』の上には

如來の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり。

「其の佛の廣大なる御廻向のものとを尋ねれば、一切苦惱の衆生が哀はれ、見捨てられぬとの廣大のお心がもとになり、夫れより常に願を發し、我が心が衆生に届くよう、衆生に通ずるやうとの廻向を先きとして、あなたの大慈悲を御成就下された」とであります。而して之より之に曇鸞大師は註釋を加え

られて、其の如來廻向に二種ありて、即ち一には往相、二つには還相である。往相の廻向と言ふは、阿彌陀佛が長々御苦勞下されたあなたの一の功徳を我々衆生に廻向し給ひて、彼の佛の安樂淨土に生れさせて下さるが往相の廻向である。又還相の廻向とは、其の往相の廻向で安樂國土に往生させて頂いた上は、佛の御恵みて奢摩他毗婆舍那方便力を成就することを得て、——奢摩多是定であり、毗婆舍那是智慧である。

其の定と智慧を成就し自由に衆生濟度の方力を得て、再び生死の稠密なる林に歸り、一切衆生を教化して其の佛土に向へるとる働きを與へて下さるが、還相の廻向である。即ち一旦淨土に往生させて頂きた上は、今度は此の煩惱の巷に再び姿を現はし、此の佛の廣大なる仰せに聞けと、一切衆生を導く事出来る身にして頂くてあります。て之は他力の上より言ふと、我々一家なり一門の間に於て、或は親と子となり兄弟となり夫婦となる。之れ皆な信心の上からは此の還相廻向の働きて、結局先きなるものは後を導き、後なる者は先きに導かるゝ姿なる事を頂かなくてはならぬのである。現に此の會の開會に當り、我々中村氏の往生に遇ふたにつきて、深く之を感ずる事てあります。中村氏は多年學舎の同朋にお目にかゝるを樂みにして居て下されたのであるが、此度不思議にも上京して講話の席に列なり下され、其の中村氏が意外にも本會の開會と共に、遺憾となりて學舎に運ばるゝといふ事となつたのである。之れ實に有縁の我々に人生の無常を示し、共に斯く淨土に参らせて貰ふのぢやと知らせ下されたお姿であると頂かねばならぬのであります。て斯く我々を淨土に

呼びよせて下さる往相の御廻向も、又其の上から衆生化度の爲め人生に現はるゝ還相の御廻向も、要する處我々衆生を救ひ取つて下さる爲めの大悲ならざるは無い。故に次には『若しは往若しは還、皆な衆生を抜いて生死海を渡せんが爲めにしたまへり。是の故に同向を首として大悲心を成就する事を得たまへるが故にと言へり』とであります。

九

次ぎに

又云、淨入願心者、論曰、又向說、觀察莊嚴佛土功德成就、莊嚴佛功德成就、莊嚴菩薩功德成就。此三種成就、願心莊嚴、應、知應知、應知。此三種莊嚴成就、由本四十八願等清淨願心之所莊嚴、因淨、故果淨、非無因他、因有也。

こは上述の廣大なる往還二種廻向にて我々を淨土に迎へ取り下さる。其の我々の参らせて貰ふ淨土には、種々の莊嚴が盡されとある。先づ莊嚴佛土功德成就といふは、極樂の國土が七寶の寶池、七寶の樹林等あらゆる功德莊嚴されてある所謂依法の莊嚴の事である。又莊嚴佛功德成就莊嚴菩薩功德成就、は無量の佛、無量の菩薩功德を盡くして莊嚴されてある、所謂の正法の莊嚴の事である。斯く三種の莊嚴の功德成就し

あるは何か。畢竟佛が我々衆生を助け度いとの淨入願心から御成就下されたのである。衆生が哀はれた、可哀相だとの遣る瀬き親心から莊嚴して下されたのであると應に知れとの『淨土論』の御教化である。而して其の應に知れとは、外の事を知れとは無い。其の淨入願心より御成就下されたとは、即ち阿彌陀佛の四十八願の我々衆生を助け度いとの清らかなる親心より御成就下されたのにて、即ち極樂の諸種莊嚴は此の廣大なる本願の親心より現はれ、我々の爲め待ち受け居て下さる有様である。斯く清らかなる親心の因より現はれし莊嚴なれば『因淨なるが故に果淨なり』其の結果としても、實に斯く清淨なる淨土の諸種莊嚴が現はれ來りたのである。此の外に他の因が有つたり、又は何の因もなく偶然に出來たのでは無いと、應に知れとの御言葉であると、之は曇鸞大師の『論註』の御文を茲にお引き下されたのであります。其處で茲は我々動もすると、淨土なる佛の世界が我々と何の關係無しに偶然あると思ふ故、極樂が有りや否やなどの不審が起るのでありますけれども、極樂は斯く大悲の遣る瀬き御心より成就し、我々を待ち受けて下さる邦土である。故に有りや否やて考えては分らぬも、極樂は斯く、衣服や喰べ物が親の慈愛より現はれ出ずると同やうに、我々を助け度いゝの大悲の親心の因より、成就せられたのである。何も因無くして、偶然現はれ出たので無い。而して往還二種廻向の御恵みて、其處へ参らせ下さるのだ、との御教化であります。

又次ぎには

一〇

又論曰、出第五門者、以大慈悲觀、察一切苦惱衆生、示應化身、回入生死、惱煩林中、遊、神通、至教化地、以本願力、回向、故是名、出第五門。

之は同じく『淨土論』の中に、廣大なる如來廻向の御恵みにより、我々が淨土に参らせ頂く有様を、五功德門といふ事によりて説かせられてある。五功德門とは、一に近門、二に大會衆門、三に宅門、四に屋門、五に菴林遊戯地門の五門で、而して今は其の第五の菴林遊戯地門に就きての仰せなのであります。先づ此の五門は喩えて言へば我々が故郷に歸る時の有様と丁度同様で、先づ段々極樂に近づき、遙に極樂の光景が目に見えて來た處が近門である。而して彌々門に至れば、澤山の聖衆がお出迎ひ下されて、此等の聖衆にお目にかゝり挨拶をなす處が次ぎの大會衆門である。而して夫より彌々阿彌陀佛の宅に入り、彌々淨土の奥座敷迄通つて親様にお目にかゝつた處が、次ぎの宅門、屋門となるのである。依て斯く彌々奥迄通り親様にお目にかゝつて無量の持てなしを頂戴すれば、此の度びは充分満足して、裏門より出て花園を散歩する格で、衆生濟度の爲めに、生死の菴、煩惱の林の中に再び出懸ける事となる。之れが茲の出の第五の菴林遊戯地門となるのであります。只今の御文には、『出の第五門とは、大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して、應化身を示して、生死の菴煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る』——即ち斯

く彌々極樂に到り、諸の法味樂を受け、佛境界の奥の奥迄極はめさせて貰うて見れば、——『正信偈』の示しにも茲をば蓮華藏世界に至ることを得れば、即ち眞如法性の身を證せしむ、煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の菌に入つて應化を示すといへり。

と仰せられ、此の度びは夫より裏門を出て見ると、種々なる花園や林がある。其の中を散歩すると同じ有様で、即ち今自分が廣大なるお恵みて、本覺明了の境界を悟らせて貰つて見れば、此の度びは翻つて今迄の自分と同じく、多くの迷うて居る人達が可哀相て仕やうが無い。そこで今度は觀音大士が三十三身を現じて、諸の衆生をお救ひ下さると同じやうに、自分も再び生死の菌煩惱の林の中に姿を現じ、今度は佛境界なる神通力を用ゐて、自由に人生有縁の人々を度する働さをさせて頂く事となる。而して『本願力の廻向を以ての故に、是を出の第五門と名けたまへり』——此の菌林遊戲の働さをさせて下さる事も、全く本願力の廻向によるのである。之が還相廻向のお哀れみであるとの御文であります。て親鸞聖人は常に此の人生に於て、直接此の大悲の御手引きを蒙る事を深く喜びなされた。即ち法然聖人は勢至菩薩の化身として、此の親鸞に直接他力信心をお知らせ下されたのである。又此の淨土眞宗の家庭本位の宗風の御手引きをなしたる聖德太子は、實に觀音菩薩の來現にてまします。我れ此の二菩薩の引導により、彌陀の本願を弘むるにありとは、聖人の常の御喜びであつたのである。又御存知の如く『御傳鈔』の中には「一生の間能莊嚴、臨終引導生極樂」との觀世音菩薩の御告命

告

白

俗諦門の重荷をおろして

原久子

拜呈炎暑の候恩師には慈光御傳導の爲め、東奔西走御障りどもは無之やと切に案じ上候。却説先般は遠路も御厭ひなく萬事御差繰り御苦勞下され、五日間寸時も御休みなく、親様のやるせなき御心を御話し下され、何とも彼とも申様無之、私の如きしぶとき横着者も、是程迄にやるせなく云ふて下さる御佛様の御心を頂いて見れば、勿體ないとも難有とも恥かしいとも、早何とも彼とも申様は無之、只々あされ果つる許りにて候。今回眞の善智識に會ずば、此高大なる御慈悲も知らざりしに、如何なる難有事にて候や、恩師態々御苦勞下されて迄、此やるせなき御心を御届け下され、誠に何と申して宜しきや、御禮の言葉も出て申さず候。世話方並信徒一同深く感謝致し居候。此回恩師の御講話に由り初めて御慈悲に氣付かれし人多々有之候。殊に當市原ひさと申す方の如きは、十年以來往生一定は間違ひなしと安心して居ますと申しながら、俗諦が守れないと多年煩悶致し居候處、今回初めて之れ迄のが眞に親心が知れてゐなかつたと氣付かれると同時に、恩

もあるものであります。すれば先き程申した極樂の三種莊嚴の有様は、必ずしも未來極樂に行きての事はかりて無い。我々が此の人生に於て、此の廣大なお慈悲を頂きて、日々善につけ惡につけお慈悲一つを喜ばせて貰ふ。此の人生日常生活の上にも、信心の上からは其の味ひを喜ばせて頂く事出来るのである。我々が此の廣大なお慈悲一つのお力て、此の人生善惡の間に處し、やつて行く事の出来るのは、全く此の廣大な如來廻向の御導きの下に日暮しさせて頂くからである。故に要する所、唯彌陀一佛の大悲を信じ、人生の順につけ逆につけ、遣る瀬無き思召一つを頂きて暮すが、何より肝要であります。

爾後序に申すのでありますが、今言ふ廣大のお姿が直接人生上に手引きして下さるといふ事を、之を我々の罪惡深重といふ事と離れて言ふと思はざる邪見に陥入り、飛んでも無き弊害を持ち來すのである。これは餘程注意しなければならぬのであります。我々は言ふ迄もなく、何處迄も罪惡深重の淺間しき私である。而して其の私を導き誘ひて、其の者を淨土に引き込む爲めに現はれて下さる手引きである。即ち言ひかへると、信心の上からは我々の心に絶對の罪惡觀が顯はれるから、從つて人生の上には救ひの御手導きが彌々明らか味はせて頂く事出来るやうになるのである。處が此の罪惡觀無しに唯人生の上にお手引きを言ふ時は、仕舞ひには人生の此の世が直ぐ淨土だといふやうの事になり、親鸞聖人など此の世からさながら菩薩の境界を味つて居られた。我々も信の上から其の生活が出来るのである。などとなると大變な間違ひに陥入るのである。斯く自分の罪惡深重を忘れて之を言ふと、折角聖人のお知らせ下された『淨土論』の還相廻向の味ひが、浮いて仕舞ふのであります。(第二回夏季求道會第六日第二部)

師の三日目の御講話に由り、入信致され今は十年來の俗諦門云々の重荷があらされ、何となく心が開けた様の氣になりましたと日々私と語り合ふては喜び居候。恩師よ私は原さんの如く、手の平を返す如き御慈悲に氣付かれし人は、其の入信の經過を未信の方々へ照會せば或は又其の導きにも、相成るべきかと思ひ、常念寺荷堂法師と談合の上、恩師へ御願致し、求道に告白して貰ひては如何やと、同人に勵め、入信の經過を恩師あて紙面に御届け申したる筈にて候。一應御覽被下度候。別府の方も從前の思想界に大變化を來し眞に御慈悲に氣付かれし人許多有之様子にて候。

大分市にて

山村 改助

謹て申上げます。去る頃は、大分市善行寺に於て、御親切なる御化導に預り難有御禮申上ます。私事は如何なる因縁にや家庭不和の爲三人の小供に別れ、昨年一月より當地にて小さき商賣致して居るものであります。以前十年間程は非常に困難仕り、私は一生懸命で盡したと思つて居る事もよく思ふてくれず、私の心を察して下さる人もないと、實に世の中はつまらぬものであると、苦るしき思ひのやるせなく佛法に志し御寺参りを最大の樂しみとして聴聞して居りました處、御佛様の御慈悲が知られて、罪業深重の私も頼む斗りの御助けに間違ひなしと安心して頂き、信の上から出來得る限りは俗諦を守らねば佛祖に對して相すまぬ事であると考へて、我心を制する爲誓を立てし事もあれど、其實行は其だ六ヶ敷く、常

に堪へ難き事、及ばざる事を心配して居りました。前申上げます通り、夫や小供に別れて居りますので、殊更に人様の注意を蒙り、俗諦は如何と云われますと一層苦るしくなつて、一念御任かせ申した身が、何んで斯く苦るしいであらうかと其苦るしき事に苦るしんで居りました。此節近角先生の御話を拜聴して見ますと、斯く心を苦しめて無理に務めねばならぬと云ふ様な御慈悲ではなかつた。私は何程よくしよふと思ふてもよく出来ず、思ふも云ふも眞に悪しき者でありますと知られて見れば、何ともして見よふのない此心がかわいそふてあると、腹の底まで御承知で同情して下さるやうでない御親切と頂いては、何とも申様もありませぬ。先生の御話中私へよく御受けしましたは、先生の御國へ大地震のありし時御本山より御法主代理として、遭難見舞に御出下されし方へ先生が及ぶ限りのおとりもちをなされたれど、それでは却つて先方では御満足ではないのである。先方では此方が斯く災難の折柄にて、何程思つても御取持ち出来ぬ其處を哀はれみてお見舞下さるのなれば、其の御親切を有難く頂く外無いと氣づかれた、と云ふ御話を拜聴し、實に嬉しくかんじました。兼て悪しき者とは承知して居ながら、少くしても御禮をせねばすまぬと云ふ様な運び心がありました。次に信は得ずして俗諦を守らふとして居る者もあると云ふ御話は、實に私の事でありました。全く信を得ずして得た心地で居りました故、俗諦が務まらぬと苦しんで居りました。私は悪いと云ふ事も知られ、御慈悲の有りがたいと云ふ事も知られて居りましたが、眞に私一人の爲の御苦勞であつたと云ふ、やる

せない親心が知られて居りませなんだ。此度先生の御話を拜聴して、斯くまで浅間しき私を、斯く迄御見捨てない御慈悲であつたと初めて心に徹底しました。腹底は只々慚愧とずがる思ひより外はありませぬ。嗚呼永々の煩悶俗諦の重荷をあるし、世の有様に任せたる機の安さ、縁にふれては稱名相續致して居ります。

和上曰く、助け給へとは、如來の助け給ふに、あとよりすがりつくことは無い。博多言葉で言へば、助けて下されませといふ事では無い。夫れは願ふといふものぢや。助るとは水におはれて死ぬ奴を、船につかみこむすがたである。溺れて居る時船主が、助くるぞといふに、上つて見ませうといふものがあるか。自分の死ぬことに向ふの慈悲とが知れたなら、夫れなら助けたまへと左右を見ずに任かせるのである。墮獄必定の此の奴を、助くるぞの仰せなきながら、稱名やら、喜びやら、信心やらをにぎり込んで、私が出かけるは、あやまりては無いか。助かれぬ此の奴と、向ふのお慈悲とが知れたら、にぎりものを投げ捨て、助け給へと投げ出すばかりである。又た助け給へとは、賜物をのみこむ事、含點した事である。

『七里和上言行録』

仕て見やう無き此の奴が

在米 寺 島 恕

私は富山縣の生れて、土地柄小供の時から、佛縁がありました。私の家では、一家の者打揃つて、佛様に御禮をとげない内は、食事を許さぬ例になつて居まして、父が毎朝夕御つとめをなさいます。御留守の時は母が代つてなさいました。それゆゑ朝夕繰返さるゝ御經は、耳なれてちつともあり難く覺えず、遂には流行うたをきく様な、印象をしか興へぬやうになり、長ずるに及んで形式に參座する事をうるさく感じ、父の厳格な精進（私の地方ではなき人の命日に、肉食せぬを精進すると申して居ります。そして私の宅では二十八日の御開山上人の御忌日と、十五日先祖の忌日二日は、絶対に肉食を許されません、その他にも毎月四五日の朝精進が御座います）を迷惑に感じ、殊に毎年、十一月廿二日より、一週間の精進には何時もこぼし、精進の文字解釋をして、肉食をとめた字でない。意味をとると勉強であるから、勉強するには大に肉食をして、元氣を養はねばならぬなどと、理屈をこね、或時はひそかに鶏卵をすつて、口をぬぐつた事もありました。父が厚く僧さんを尊まれ、自分の學資について、始終儉約々々と申さるゝに、佛事に關する、喜捨金を惜氣もなく、御出しになるのを見て、不快を感じ、深夜念佛申されて、隨喜の涙にくれらるゝ御両親の物語をきくと、迷信の極まりなりと情けなく存じ、理を明かにしてあの迷を除てあげたい

ものと考へました。

當時自分の學校の數理受持の主席教諭が、故鈴木南隱老師の御弟子で、修行の積んだ御方でありまして、腹力の養成をしきりに御さかせ下さいました。劍道の先生も、故山岡鐵舟先生に縁深き御老人で御座いまして、是れまた大の下腹主義で御座いました爲め、禪味の書物を嬉んで見まして、劍禪一致などと我物顔に天狗になつたことも御座いました。

明治四十年三月出京して、上野の美術學校金工科に入學するにあたりまして、御深切な先生の御紹介によりまして、白山道場の天地師を知り、更に同氏の紹介によつて、宗演老師、柏樹老師、京都の宗鑑老師などに、まみゆる事を得ましたが、一則の公案も通らない内に、煩惱の犬に驅られて、大なる罪惡を犯すに至つて、一度は死を決して、遺書を認めた事もありました。が、愛慾の塊りの横着者には、元よりそれを決行する勇氣がなく、反つて自分に都合なる口實を設けて、わずかに苦惱を慰せんと勉めました結果、鐵面皮にも美術家は一通り道樂すべきもので、道徳はどうのこうのと、そんな者を考ふべき者でない、大自然を樂んで、初めて大傑作を得るのであるなどい、叫び、生恥を晒しながら、心猿意馬の狂ふに任せ、遂には罪を罪とも思はぬまでに墮落しました。

然るに不思議にも昨年春、事なく卒業が出来まして、親しき友の世話によりて米國紐育市に職をうる事になりまして、昨年九月末に渡米致しました。兼てシアトルの友人より、君の渡米を鶴首してまつと、度々手紙をよこして居りましたので、出發前に着港日を通知して、宜しく依頼して置きました

から、船が棧橋へつきますと、屹度出迎へてくれる筈と信じ、目を丸くして尋ねましたが、見えません故、少し不安の念を生じましたが、時間の都合が悪くて来れなかつたのだらうと、宿を尋ねると一週間前ローザンセルスへ引越したとのこと、そこで大いに友を恨み、且つ人のあてにすべからざることを痛切に感じました。そうなつて見ると何處に落つていゝやうら一向に様子がわかりません。幸にも同船者がシャトル佛教會に御住ひなさつたので、こゝで十日餘り滞在致しました。此間思はぬ方の御深切によつて、同窓の先輩にも會し、二三の白人美術家にも接して、その製作を見る事を得ました。汽車中は亞米利加通の御方と同道せるため、頗る愉快に着紐致しました。殊に九州、門司、京都など、命名せる客車や倉堂車、展望車などに、格天井角燈籠などの日本式装飾の用ひられ居るを嬉しく思ひましたが、それも束の間で、唯一の目的たる自分の仕事は日本での想像と全然反するに及んで、非常に落膽しました。こゝに又先輩諸氏を煩はして、米國第一の金地プロビデンス市に下ることになりました。十一月末一封の紹介状を持つて出かけました處、先方の御方が御深切に御迎へ下されて下宿世話やら仕事についての世話やら、悉くうちあけて下さいまして、只々感謝して居りました。御蔭で愈々仕事に掛つて見ますと、日本の彫刻法とは異り、はる／＼持つて來た道具が一つも役にたゝず、殊に修業時代に怠つた未熟の腕故手の出し様がありません。全然素人のごとく、最初歩より習はねばならぬ、其のくせ學校を笠に着て頭が高い爲め、それだけ煩悶が多い。亦靜に淺間しき過去を思ひ、暗黒の未來を思

ふ時、戰慄の外なく、眞に吾が心の苦悶を知り、憐み同情をしてくれる人がないのか知らと叫んでゐました。或る日荷物の中から、自分が出發の際故郷の辻惠明御僧から、惠まれた『信仰の餘瀝』と『佛教講話』とが出て來たので、早速讀みました。佛の光を見よの聲をきけだのとあるのが、何だ馬鹿々々しいとやめてしまひ、平等觀の一段を見ましたが、之は理屈じやと感じました。而してその後愈々不如意の生活打續くに及んで、煩悶ます／＼烈しくなり、二月の末亦居を隣洲アットルボロ市に移らねばならぬ様にあり、愈々轉々計りがたきこの身の不幸に泣きました。四月の末に東京の友人から、第拾卷第一號と二號の求道を送つて來ましたので、先づ二號は死して活躍せりとの告白を見まして、自分もこの様に喜ぶ事が出來たら實に仕合はせてあるが、一向わからぬ故、只秦様を羨しく存じて居りました。その後日を重ねて、ぼつ／＼讀んでゐます内、嘆異鈔第二章「念佛はまことに淨土にむするゝたねにてやはんべるらん、また地獄に落つる業にてやはんべるらん、云々」の引證を見てなる程と力を入れて進むうち、手織の着物の一節に至り、噫如來の御慈悲は、かゝる宏大のものであつたか、この仕て見様ない一生造惡のこの奴の心が、親様の御心を痛めまゐるる源であつたかと電光の如く閃めいて、あゝあり難い、かたじけないと涙がとめどなく流れいて、よろこばして頂きました。以來、大悲の光明に照されて聊かの惱みもなくなりました。而して罪の子の惰性と習慣により、親様を忘れて煩悩の惡鬼に動亂さるゝ時仕て見ようなきこの奴が」と思ひ出さして頂いては、如來

の大慈悲に泣いてゐます。同宿の吉井八百一君は（當市には私と同氏と二名しか日本人が居りません。私が當地の工場には入れたのも、同氏の深い御同情によつたのであります。香川縣の人、矢張り熱心なる眞宗の家に人となり、圓満の人格と羨望に不堪、清かな過去の生活を有して居られ、且つ信心もふかき方であります所から、始終御慈悲の御話を語り合ふ様になりましたが、このほど吉井君の藏書の中から、第九卷第一號の求道が出てゐりました。表紙光背模様の真中に「謹呈米彌兵衛様明治四十五年二月十八日、竹三郎」と鉛筆で記して御座いましたので、早速拜見いたしました。加藤竹三郎さんの告白が載せてあります處より、御兄弟に御送りになつた御本と知れ、誠にあり難く拜見さして貰ひました。さて其の次が三須善太郎様の「何んて父とは隔て心があるのであらう云々」の告白を見ました時、丁度自分の心をなぐられる様な心地がいたしました。私が過去の罪惡を顧みて、苦悶にたへなかつた時、この苦悶及悶えの源は、吾を隔てしは父にある、若し父が母の吾に對する如く、陰に陽にいつくしんで下されたなれば、薄べらな他の愛情に溺れなかつたらう、あんな惡魔の掬にもなり終へなかつたらうにと、勿體なくも恨んだことさへあります。

今この告白を見て、自己心中の隔て心が大起因であつたことに氣付、父が常にわしの八益敷言ふのは、一つもわしの爲に云ふのではない、皆んなそち達のためじや、わしの死後は命日に肉食してもかまはぬが、御開山上人の忌日と、先祖の日だけは精進して、佛様を大切にしてくれと仰せられし事、渡

米の際、御佛壇の内から大切な紺地金泥の御名號を取出して是は唯一のはなむけと下された眞心に思ひ當つて見れば、父上の行爲の總てが、御慈悲の塊りであつたと覺え、淺間しく、悲しく、恥かしい、亦有難くうれしく、思はず聲を放つて泣出し、すまない／＼と立上つて、室中をぐる／＼わけもなくまわりましたが、ふと御慈悲に氣付かして貰ひ、あゝあり難いと存じまして、今は一刻も猶豫が出來ない。早速是迄の大罪を謝し、且御慈悲を頂かして貰つたよろこびを申送て共に喜んで貰はねばならぬと、筆をとり、尙兄上様の御信心の程も案ぜらるれば、求道を縁として導かして貰ひ度いと、近角先生に御厄介を希願ふ次第で御座います。かゝる殊勝の心が、罪惡深重の仕て見ようなき此の奴におこるべきゆはれが露程も無いけれども、全く親様の御廻向によつてなさしめ玉ふ。あゝありがたや南無阿彌陀佛、／＼。

御佛の御慈悲を感謝して貰ふと共に、近角先生、秦敏之様加藤竹三郎様、三須善太郎様との御縁をよろこび、御恩を深く感謝致します。

信仰のたより

拜啓酷暑之候、先生に於せられては當地へ御光來中は日々數回の御講演被遊候ひしにも不係、御障りも御座なく候哉、御伺ひ申上候。さて、此度と申す此度は、以御蔭、萬劫の初事に氣づかせて頂き、彼れ是れ苦情計り申居候て、親様や、先生や、御困らせ申し、して見様もなき罪惡の塊を、あくまでやるせなく、見捨て給はぬ廣大の御慈悲一つに打明され、實に勿體ないやら、難有やら、只是計りに候。先生を、多度津港にて、御見送り致し、再び九尾仁平様方へ立寄らせ頂き、九尾法兄佐々木法兄と嬉ばせて頂き、夫より多度津驛にて乗車致し高松驛へ着するまで、「山も山道も昔に變らねど變り果てたる我心かな」只廣大の御慈悲一つを頂き、唯御念佛を稱へさせて頂きつゝ、難有歸宅致し候。右乍略儀以寸楮、深く御禮申上候、時下酷暑の候、幸に御身大切に被遊ん事を祈る。

七月二十六日

早々 敬白
徳田 宗藏

拜啓殘暑烈しく候處、益御清榮御傳道被遊候段、感謝の至りに候。今回は不思議の御縁にて弊地に御留錫被成下、御懇篤なる御化導に預り候事、御禮の申様も無之候。先生の御温情

先生の御恩徳忘れんとして忘る能はざる次第感銘に不堪候。尙先生の御教化に感泣して、道に入りし新なる友多々有之候。只今も師範の廣瀬教諭訪ね來られ、共に大悲をたゝへ申候。昨夜は求道會例會にて、原君三浦君十數名と喜ばせ頂き申候。尙原人といふ女性は、先生に御目にかゝらざりしも、五日の御講話を拜聴して眞に徹底したるやうにて、殊に喜び居り候。先は廣大の御恩徳に對し、御禮申上度、此段得貴意候也。

敬具。

大正二年八月十日

荷 堂 弦拜

三

拜啓朝夕は、餘程涼しく相成り候ところ、先生には其後御障りもなく愈御機嫌うるはしく、御歸京遊ばされ候御事と推し上げ候。さて過日は地方御傳導の折柄、御多用中をも憚らず、御邪臆申上げいとゞ、御懇篤なる御教化に預り、多大の御恩恵に浴し申候事、一々御禮の申やうも御座なく候。殊に堺別院にて、御別れの際は、御講話後の御疲れをもいとさはされず、實に結構なる御言葉を御揮毫下され、忝さ心肝に銘じて、忘れがたく候。御筆の見事なるは更にも聞えず、あの御言葉を熟々拜見いたし候に、勿體なくも、六百五十年前に罪深き私に代りて、親鸞聖人の仰せ下されし御言葉のやうに感ぜられ、いつも承りたり候御言葉ながら、今度始めて承りたらんやう、新なる感にうたれ、有難しとも忝しとも、申す言葉も御座なく候。さて又彼の折は、残念ながら自分事腹

のほど、身骨に徹して有り難く、大悲の御手まわしに感泣仕り候。私は僧侶の身のはづかしくも、切なる大悲を知らずして、自分の信念は既に十年以前哲學的思辨を棄て、形式的教義を離れて、實驗上大悲に接觸せしものなれば、何者も奪ふ可らざる大安心を得たる如くに思ひ做し、自分の生活のあさましきにつけ、僧侶として信者として之ではならぬと、信後修養の必要なるを思ひ、同行に對してもかく説き來り、而も之れ自力的奮勵心にあらず全く他力の御はからひなりと臆面もなく説明し來りし事の勿體なさ、身の毛もよだつばかりに候。尙之にもあきたらず、之まで慕ひ參らせし東陽圓城師の修道院に走せ參せんと、二三の同友と約せしなど思ひ至れば、慚かしき限りに候。此我慢の固執は先生に謁しても容易に解けず、あさましくも先生に對し奉りて抗爭するが如き態度に出てしこと何とも相濟まざる次第に候。然に先生が其心が不便だ可哀相だ、其者を飽くまで見捨てぬの御言葉に、初めて夢の覺めたる如く、如來様のやるせなき大悲はこの私の爲なりしかと一念氣づかして頂きたる時の心持は、何とも申様も無し、はづかしく覺えず涕泣致したる次第、眞に煩惱具足とは私の事、此心に安心せしと思ひしことのおはづかしさ、其心が可哀相だとの御一言、かたじけなき極みに候。其夜も夜深くるまで吉田兄と大悲をたゝへて、うれしさ有り難さ申様も無之候。實に之までの窮屈なる俗諦の重荷を先生の前に投げ出したる心地にて、其後は懈怠勝ち乍ら、稱名相續致居候間御安神被下度候。誠に此節は因縁あるをかならず、名師に逢ひ奉りて、如來の慈光に浴せしこと喜びの中の喜びに過ぎず、

痛の爲一寸御傍を立ち違ひ候ひしかば、先生お立の事を存ぜずして、積る御禮も申上ず、實に失禮の至りに御座候。御別れ申したるあとの名残をしさも一入にて、今一度御宿を伺ひ奉らばやとも存じより候ひしかど、何とやらん頻りに、胸苦し相成り、暫時休息致し居り候間に、日も黄昏に迫り候ひしかば、心を殘して歸途につき申候。誠に氣根最劣の身とて、其夜より翌二十六日にかけて、身體意に任せず、京都にて終日休息致し候。それにつけても極暑の折柄、幾十日と、日を重ね、夜を連ねさせられて、此處に彼處に、御熱心なる御講話をお続け遊ばす、先生の御苦勞をお察申して少しの御障りも見え給はぬ、御法徳の然らしめ給ふとは申せ、衆生御濟度の爲には如何なる水火の難をも御厭ひなき、佛の御誓願を思召すが故にこそと、おはかり參らするにつけても、貴き御法をお聞かせに預る身の、などかくは氣根なからんと愈以て淺ましく、實に兎の毛の先程も戒行の保たれぬ身にて、具足のものとは煩悩計りと知らせて頂き、これなるが故に五劫思惟の御本願も、兆載永劫の御修行も、又宗師九十年の御苦勞も、全く私一人の爲にてまじ／＼けりと、心底より思はれて、勿體なさに涙せさあへず候ひき。かくて廿八日御眞影の御前近う出候ひし時は、今日迄の如來聖人の御大恩と自分のわるさとが、一時に胸にせきあげられて、他の見る目も打忘れよと泣かれ申候。

嗚呼、私は是迄幾度か京都へも出てながら、或時は御本山の前を素通りし、或時は形式だけ參拜をとげ、殿堂門樓の壯大美麗なるに眼を注ぎては宗師の德澤は偉いものなりな

ど勿體なくも他人の成功をほむるやうな心持なる故、かばかりの御大恩をも我身の上の事とは思ひ申さず、心底より、頭の下りし事は御座なく候ひしを、今度はじめて、やるせなき御親心を知らせて頂き、懺悔と感謝の思ひにくれて、

「泣くまゝと思へどひとり泣かれけり」

やゝ久しくして頭をもたげ、仰いて御眞影を拜しまつれば、何か物をも仰せらるゝ如く、我蒙昧無智を憐れとうなづかせ給ふごとく、さながら生たる御方に、向ひまつる心ちして人々退散致したる後も、立たんとしては居坐り、かへらんとし

ては戻り、

ことさらに罪とが重き身にあれば

親のみもとは立ちうかりけり

嗚呼曾て御本山の前を素通りにせし私に、是程佛の御心をとおとゞけ下されしは、偏に先生の御かげにて、又其御勸化を蒙らしむべくも導き下されしは、佛の御方便に外ならずと存じ候。熟々春以來の事を考へ候に、決して偶然の事とは覺え申さず、人並にこえて罪障重き身に候へば、如來大悲の御目には、如何にも危くも見捨てがたく思召して、種々に善巧方便の御救ひに預り候事とよるこび入り申候。草津にてはじめ

て懺悔申したる時は實に先生の仰られし通り、左程よろこびの心はなく大悲の光明を障子越にをがみ居たらんこゝちにて候ひしを、二日三日と貴き御法を直々に頂き候うちにいつしか迷ひの雲はれて、無明長夜の闇天に輝き出る太陽の光を拜める心地致し候。

照します法の光をよそにして

やみの長夜に惱みこしかな。

苦しみの海の底まで落ちし身の

すくひのあみにうかぶうれしさ。

不文無筆の私にて、わきて歌などの心得は御座なく候へど、よろこびのあまり口ずさめるまゝを恩師の君には何事も隔て置ぬ心にて、くだくしき事ども申上候。されば失禮の言葉も多く候べけれど、萬事御許し下され度候、只今はかやうに喜ばせて頂き候へば、猶其下より妄念も起り、淺ましき心も生ずる事と覺悟いたし居り候。されど機は善惡には目をかけず、お念佛して日暮させて頂かんと存じ居り候。猶此上もよろしく御指導下され度、切に御願ひ申上候。末筆ながら時下御厭ひ專一に念じ上げ候。奥様へもよろしく御傳言願ひ上候。

九月六日

河崎順

四

謹啓秋風漸く身にしむ候と相成候。其後先生には、益々御壯健御傳道の御事と遙察致し居り候。此度別府山口に於ては非常に御世話に相成、色々御心配相掛け、何とも御禮の申様もなく、先生の御恩獨り感謝仕り居り候。

別府山口にての胸中の苦悶、今は全くはれ、唯偏に佛の御慈悲に感泣いたし居り候。今日迄僅か中學や、専門學校の少しばかりの科學智識を以て、佛の如何を考へ、且つは謗法、實に我身の罪深き事空恐らしく、唯々御見捨てなき佛の御慈悲一つ頼み居り申候。

一家の中も全く以前とは一變し、兩親も非常に悦んで下され、小生を可愛がられ候事の、今更氣付きたる心地致し、覺えず朝夕の御つとめも涙と共に致し居り候。思へば皆これ先生の御恩、誠に――申上げ様も御座なく候。只今にては土曜會がまち遠くて、時には吉田法兄と共に悦ばせて頂き居り候。あゝ誠に――不思議、唯御念佛にて日暮致さして頂き、他に何の望みも御座なく候。南無阿彌陀佛――

九月二十二日

安河内義夫

五

一筆啓上仕候。秋冷の候御さわりも御座なく候や、御伺ひ申上候。本年夏期中縣下共和村へ御巡錫の節は、誠にありがたき御教化に接し、早速御禮狀差出すべき筈の所、京都御在所不明の爲め失禮仕り、其後求道にてとくより御歸宅との事承知致し居り候へ共、貧乏暇なしで日々いそがしくして、煩悩ばかり相作り今日迄失禮仕り候。何共申譯無之候御推察下され度候。美稱郡に於ての御講話、一重に我爲めの御苦勞と存じ候。多くの人の中私が一番多く徳をとり申候と存じ此の上もなく嬉しく仕合に存じ候。

嗚呼「内愚外賢」實に有りがたく、私に對しての御意見と存じ候。眞に――内愚外賢に有之候。

何とつまらぬ私でありませう。是迄は人か惡しき事をなすとはかり思ひしに、世界の惡しき人の罪は私一人して皆有つて居ります。新聞の三面記事、皆私の心の現れ、かゝるもの

とかねて御承知の………勿體ない。色に迷ひ聲に迷ひ、一つとして罪惡ならざるなし。僅か人の顔色をさへ見ても我心に作る罪、嗚呼眞に迷ひの凡夫とはよくも――申されし事に候。

我信仰かくの如くにて喜ぶが喜ぶやら、有りがたいがありがたいやら、涙の出るが真やら、口で云ふのが真やら、私の方は皆うそ事たわ事、一分一厘も取りどこのない事をわからして頂き、只だ――阿彌陀様の御言葉のみ一つがたよりとなり、誠に仕合者と存じ候。(下略)

十月七日

岡野秀一

盤峰雲晴れて四十八願、月圓かなり。王城春來て十六想觀、華鮮かなり。月の光百練を重ねて、彌陀影の如くに現じ、草の色七寶を八つて、國界嚴飾せり。

――『往生十因』

雑 録

御舊蹟の處々

(求道學舎日曜講話の一節)

一 傳道中の御縁

久しき間夏季傳道に出て居りました。今日は其の後初めての講話であります。就きて今日は今夏傳道中に遇はせて頂きたる御縁、殊に今年は法然聖人の御舊蹟を多數訪ねさせて頂きた故、其の話を主と致し、猶ほ平素頂かせて貰うて居る法然聖人御教化の趣き、殊には親鸞聖人が、其の法然聖人の御化導を頂かれたる、其の御頂き方が、即ち私共の頂く可き頂き方を示されたる事なれば、夫れに就きお話致さうと思ひます。

二 讃岐に於ける鹽飽島其他

先づ法然聖人の御舊蹟に、偶然參詣させて頂きたる、其の御縁より申さうと思ひます。今夏は一番初めに讃岐に参つたのであります。こは此の兩三年、中絶えて居つたのであります。従前より非常に御縁のある地で、今年で第六回目に参つたのであります。讃岐に参ると、御承知の法然聖人御流罪の地たる鹽飽島がある。鹽飽七島とて、七つ島がある中の、

本島が御流罪の地でありまして、茲には前年一度参りました事がある。其の時は夜おそく船で着き、僅に島の宿と言へば言へる如き茅屋に泊り、翌日法然聖人のお出でになつたといふ寺に参りました事である。こは今日では見る影も無く、唯寺が有るといふ丈けの事でありますが、昔は名高き所にて、法然聖人が七十六歳、流刑の身として此の島にお渡りなされた時、高階時遠入道西仁が、風呂を設け、美膳を用意してお迎へ申した。其時聖人風呂を召して非常に御満足になり

極樂もかくやあるらんあら尊うと

はや参らばや南無阿彌陀佛。

といふ歌を咏まれたといふが茲である。夫れから其の對岸が九龜であつて、九龜の町はづれには權堀の正宗寺といふがある。茲は法然聖人が船で此の濱に着き、權を以て堀られたら清水が湧いて出たと傳へる所で、今も其の泉が残つて居る。前年土地の篤志家が、其の門前に大石を立て、此の地を記念するといふ事で、夫れには南無阿彌陀佛を刻み度いといふので、私が依頼により、其の文字を書いた事がある。四國にお出でになる方は、九龜の附近で注意なされると、汽車から其の石碑が見えるのであります。茲でも又

南無の船、阿彌陀の櫓で堀る清水

末の世までも佛々と涌く。

といふ法然聖人の御歌がある。何だか俗なやうな歌でありますけれども、誠に有り難き歌故、法然聖人に有りさうに思ふのであります。猶ほ先きの鹽飽島に於ける有名なる御歌に阿彌陀佛といふよりほかはつものくにの

なにはこのこともあしかりぬべし。

さて之れだけは前年參詣して置いたのである。去りながら、私は夫れ程讃岐に参りながらも、聖人が同地であちこち御苦勞なされた御舊蹟には、未だ參詣の機を得なだったのである。夫れは傳道中は殆んど寸暇なく、一晚、半日の暇も作る事困難であるからであります。處が幸に今年は偶然に暇が出るやうになりました故、今年は御舊蹟に參詣仕度いと思ふと話すと、土地の方が是非案内してやるとの事で、今夏は法然堂といふ法然聖人の隠居して居られた所、及び高篠の圓成寺と、此の二ヶ所に參詣したのであります。何れも之れと申して、お話する程の事も無い。幾らか寶物が有つやうてありますけれども、其の有つた物もお話する程の物で無い。唯何れも土地が、法然聖人御苦勞のお跡である事を難有く喜ばせて頂いた事てあります。

三 攝津勝尾寺——賀古の教信沙彌

さて斯く讃岐で御舊蹟を参拜して居ると、それは七月下旬の事てあります。又此の度びは歸京前、大阪附近なる豊能郡の郡長からは是非来て話せといふ事で、一旦断つたのでありますけれども、無理に言はれて行く事になつたのであります。其の参りました所が、箕面山のほとりて、箕面山から三十丁ばかり行くと、勝尾寺なる名高き名刹がある。法然聖人が彌々流罪が許りて後、京都にお歸りになる迄二年の間、鹽飽島より此の地に移り、此寺に滞在なされたといふのである。『古德傳』に

は、聖人が此の寺へ所持の一切經を贈られたといふ事も書かれてあります。して此の寺より京都にお歸りになりて、お果てなされたのである。こは古來よりの名刹で、斯く私は讃岐で御流罪の地を踏み、歸りには又聖人晩年の御舊蹟地に參詣するを得たのであります。此の勝尾寺の山の上に、二階堂と稱する堂がありて、現今のは後に再興したものであります。此の二階堂に聖人がお出でになり、猶ほ此の二階堂で隠れになつたと迄稱して居るのである。こは勿論間違ひに違はぬのでありますけれども、併し聖人のお墓迄が存して居る位ひてあります。而して茲が彼の名高き

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつ紫の色にみなさん。

といふ御歌のあつた處である。先年故福田行誠上人が、此の傍なる戒譽師の庵にて聖人の此の御歌を追懷して

今もまた昔ながらの白雲を

この柴の戸にしばしながめん。

の一首を柱に遺して行かれたといふ事である。

猶ほ又此の寺には難有き因縁が存して居るのであります。夫れは親鸞聖人が、

われはこれ賀古の教信沙彌の定まり。

と仰せられて、常に聖人がお慕ひになつて居つたといふ教信沙彌の因縁が此の寺に傳はつて居るのである。此の事は永觀律師の『往生十因』にも詳しく出て居るのであります。夫れは昔此の寺に證如上人なる高德が有つて、此の寺で草庵を結び、五十餘年の間念佛定を修し、十二年の間無言の行を持つ

て居られたといふのである。すると貞觀八年八月十五日といふ日の夜、何處とも無しに空中に音樂が聞えて、ほととぎすといふ上人の柴の戸を叩く者がある。して其者が言ふには、「我は是れ播州賀古の沙彌教信といふ者である。今、自分は時來りて極樂に參らせて貰ふ處である。又上人は明年の今月今夜、淨土のお迎えを受け給ふ可き間、自分は此の事を知らせに來た」と、言ふかと思ふと、音樂と共に西の方に消え失せて仕舞つた。玆に於て證如上人驚いて翌日早速人を遣はし、晝夜兼行で賀古に至らせ色々取り調べさせられた、けれども何うしても分らぬ。すると賀古驛の北方に當りて、頻りに鳥の糞つて居る處がある。行きて見ると小さな「かまぼこ小屋」があつて一人の老嫗と小供が泣き悲んで居る。傍に、一個の新らしき襦袢があつて、其の顔容少しも損せず、さながら笑みを含める如き様である。就きて聞くと、こは老嫗の夫、教信沙彌なる者の遺骸であつて、教信沙彌は既に去ぬる十五日の夜亡くなつて仕舞うた。一代人に雇はれて働くを業とし、其の間晝夜に念佛を稱へて亡くなる迄少時も休まなかつた、といふ事であつた、といふのであります。して此の時證如上人より使ひの人が來た事を村人が聞き傳へて、村内の道俗男女襦袢の周圍に集まり、頻りに教信の事を讃稱嘆息した。證如上人此の事を使ひの者より聞かれて、「我が年來の無言の行、教信沙彌の口稱に如かず」と、之より從來の行を改めて、聚落に出て、他と共に念佛せられ、斯くして翌年八月十五日、果して教信の告げの如く、大往生を遂げられたといふのである。此の教信沙彌はもと南都興福寺の英傑で有つたのが、深く念佛を喜び、顯譽の身を厭

四 比叡山横川谷

猶ほ又話がずつと逆上りて、法然聖人幼年の御時代の事になりませんが、私は滋賀縣の者でありながら、今日迄比叡山に登る機會が無つたのである。今年幸に折を得て叡山に登つた爲め、聖人御幼時の舊蹟を、はたから參拜する事となつたのであります。私が登つた目的は、法然聖人より寧ろ親鸞聖人の御舊蹟を探る爲めであつたのであります。——八瀬といふ所より登り、先づ横川といふ所に出た。横川は叡山の中でも、最も北の方なる一つ別區域を爲したる谷深き處であります。こは慈覺大師の開かれたのを、慈慧大師が繼がれたので、其の慈慧大師のお弟子が、即ち横川の源信僧都である。源信僧都は即ち日本に於て他力の教を法然聖人以前に唱へて下されたが源信僧都である。其の横川に參ると、横川は實に深山幽谷で、叡山の中でも殊にあらたかなる谷深き森嚴幽棲の處である。玆にお出でなされて源信和尚は『往生要集』を書き、又念佛を稱へられたのであります。

五 坂本來迎寺の十界曼荼羅

話が甚だ混雜しますけれど、此の叡山に登る前に、江州坂本の來迎寺に參つたのであります。こは開基は傳教大師よりであり、が源信和尚が此の寺にお出でになつて、阿彌陀如來の來迎を感得せられたといふので、寺名を紫雲山聖衆

ひて南都の栖を遁れ、播州賀古のほとりに庵を結び、一代日雇となつて、念佛した者であるとの事であり、親鸞聖人『改邪鈔』に

我はこれ賀古の教信沙彌の定なりと云云。しかれば緯を專修念佛停廢のときの左遷の勅宣によせましとて、御位署には愚禿の字をのせらる。これすなはち僧にあらず、俗にあらざる儀を表して、教信沙彌のごとくなるべしと云ひ、これによりてたとひ牛盜とはいはるべしとも、もしは善人もしは後世者、もしは佛法者とみゆるやうに振舞べからずとおほせあり。

とある。世人この教信沙彌の定なりといふことを思ひ間違えて、貧しき生活をせられたといふ事に着眼し、所謂今日の理想的の青年が田園生活とか、簡易生活とかいふやうの意味にとりて、却つて賢善精進の姿に見あやまる傾きが無いとも言へぬのである。こは大に戒むべき事なのであります。『改邪鈔』の御文に明かなる如く、聖人が愚禿と名のりて、非僧非俗の有様を表せられた事は、此の教信沙彌が日雇人間になつて念佛を稱へたといふと、同やうである。故にたとひ牛盜人と言はるとも、もしは善人、もしは後世者もしは佛法者と見ゆるやうに振舞ふべからずといふ事は、蓮如上人の『御文』では、表に念佛者らしくせなといふ謹みをとかれた事になりて居れど、聖人の意味では、自分の眞の價がたとひ牛盜人とは言はれても、善人だとか後世者だとか言はれる値打なき者であるとの事である。即ち「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懷けばなり」とあると同意であります。

來迎寺と謂ふのであります。此夏母が言ひますには、毎年八月の十六日、此の寺に於て源信和尚の書かれたる十界の圖——即ち『往生要集』中に説かれたる十界の圖の、一番もとの物を見せるから、拜み度いと言ひますので、私も丁度よき折りと、叡山に登る三日前、母を伴つて此の坂本に參つたのであります。之も實に有難き御縁で、——勿論源信和尚が自から書かれたものでは無い。巨勢の金岡の弟子に書かせられたものであるが、如何にも立派なものである。俗に地獄の繪と言ひますもので、我々地獄の繪といふと直ぐ俗なものとの考を起すのでありますけれども、見ると我々日々の行動や、日常の淺間しき心の有様が、よく表はれ居る。こは皆様に御承知の事であり、すけれども、熟々拜觀するに、頗る意味深い。私の友人に美術にたけて居らる、武田氏が嘗て之を見て、「あれは中々意味が深いらしい」と言はるゝから、「イヤあれは源信和尚の『往生要集』の中の事を書いたもので、我々日々の行動云々は皆な彼の中に書かれてある。中には、木があつて木に一杯の刺があつて、皆な下向ひて居る、すると其の樹上に女があつて、玆に來いと呼ぶ故、肉を裂き血を流して、非常に辛苦して上に昇ると、今度は女が下にありて、又ありて來いと言ふ。又肉を裂き血を流して下りて行くと、女は又上にありて招く。斯くする事常にして少時も休みが無いといふやうの事が書かれてある」と話した事があります。斯く地獄の様を書き、猶ほ夫れから生老病死の當てにならぬ事など、次第々に書かれてある。私共平素地獄の繪といふと、「あゝあれか」位に思ふて居るのであるけれども、人生問題と言はん

か、生死問題といはんか、私共日常三惡道の苦みの有様が、能く表はれて居るのであります。現に私の母が「之を見ると昔から血を吐いて死ぬるさうぢや」と申して居る。現に『往生要集』を見ると、之は地獄の苦みの何分一かを書いたもので、若し全部を書けば、見る者吐血して死ぬると書かれてあるのである。猶ほ此の外に一方には又、極樂の尊き有様を書いた極樂の曼荼羅がある。又其の外に惠信僧都(源信和尚)の像などありて、座ろに源信和尚が『往生要集』を書かれた昔を、此の坂本來迎寺に於て偲ばせて貰うた事であります。

六 惠信院

さて前に斯く如き御縁ありし故、横川に参つた時は、一層惠信僧都の昔を、偲びたのであります。最も今日では昔の建物は焼けて無けれども、近年建つた小さな惠信院がある。併し兎も角も惠信僧都の居られた所に参らせて貰つて、一旦歸りかけたのでありますけれども、何うも惠信僧都の墓が有りさうに思はれた故、案内者に聞かせて、探がしたら果して有つた。夫れにも参りて昔の御苦勞の様を思はせて頂いた事であります。猶ほ迎ると色々の事がある。御存知の方も有るであらうが、叡山を江州の方にありた處に、堅田といふ所がある。私は此の夜、堅田で話す約束になつて居つたので、其の夕叡山を下りて、堅田のお寺の住職に迎はれて堅田の浮御堂に参つた。近江入景で有名な浮御堂である。茲には又源信僧都の御作の千體佛がある。最も本當のものは洪水で流され

て、今有るは近頃出来たものであるけれども、兎に角茲でも源信和尚の御縁に遇ふを得たのであります。

七 觀念の念佛か、稱念の念佛か

さて抑々法然聖人が、念佛門を開き下された大もととは此の横川にある。此の横川の源信僧都の流れを傳へた方に、叡山に、叡空なる人ありて、法然聖人は幼少の時此の叡空阿闍梨の下に在りて、今言ふ『往生要集』の講義を聞かれた時に、選擇本願念佛の趣きを、初めて感じなされたのであります。夫れは幼少の時、叡空上人の下に『往生要集』の講義を聞かれた時、御存知の如く『往生要集』に説かれてある念佛は、觀念の念佛と言つて、心に十界一如の理を觀する觀念の念佛であるか、又は南無阿彌陀佛々々と口に念佛を稱へる稱念の念佛であるかと、此の二義に就き從來叡山では觀念を重しとし、稱念は觀念の出来ぬ愚かなる者の爲めにあると、説き來つたのである。けれども聖人は此の時、これは源信和尚は、稱念を先きとせられたものであると、御覽なされたのであります。そは既に『往生要集』の序文から

夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざる者あらん。但し顯密の教法其の文一に非ず、事理の業因其の行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや、是の故に念佛の一門に依て聊か經論の要文を集め、之を披き之を修するに、覺り易く行し易し。

とあつて、修し易く行し易しと仰せられた源信和尚の思召は、即ち南無阿彌陀佛の二法は、行し易く稱へ易き念佛なれば、こは必ず稱念の念佛を指されたのである。決して觀念の意味では無いと御覽なされたのである。今日は何だか昔話になり、青年諸君に對しては、甚だ古き事を申すやうでありますけれども、古きを温ねて新しきを知る。此の古き問題が、今私共の所に頂く可き問題なれば、古きを捨て、其處に新しき味を頂くねばならぬ事であります。で今の觀念稱念の義に就いても、觀念の念佛といふは、高尚なる方の念佛であつて、之れになると事理の業因、其の行色々ある。事といふに、事柄の上に佛の八十隨形好のお姿を目に見る如く觀するのが事で、理は理屈の上に十界一如の理を觀するのが理である。斯く觀念となると、或は形の上に、或は理屈の上に、色々の觀念があるが、要するに之を今日の思想上より言ふと、此方の心で作上げたものは、皆な觀念の念佛である。能く今日の人が此方より佛に向ひて「私は佛のお慈悲を斯ういふ風に思ひます」斯ういふ事に頂いたと言はるゝが、之になると即ち此方の心で皆なこさをたものとなり、觀念の意味となつて仕舞ふのであります。で今其の觀念の念佛で無く、稱念の念佛であるといふ意味は、斯く我々此方より「あー斯う」と心を凝らして頂く信心でなく、心に廣大の恵みを頂き心より敬虔の念を持ちて、南無阿彌陀佛と稱へ喜ばせて貰ふ念佛であるとの事である。こは實に自力と他力の分れ目、又難行道と易行道の分れ目、又親鸞聖人より言ふ時は、眞假の分れ目となるのである。假といふは、自分の心で作り上げ喜んで居

る信仰が即ち假で、眞宗の眞の意味はと言ふに、彌陀の本願と信じて念佛を稱へるといふ此の稱念の味ひの外に無い。で私の親の能く申した事でありますが、法然聖人が後の時、澤山のお弟子を集めて『往生要集』の講義をせられた時、先づ聖人が「夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざる者あらん」茲の一句を讀み上げ給ふなり。聽法の關白兼實公、感極つて頭を大地にすりつけ、泣いて頭が上らなんだといふ事である。如何にも法然聖人にすれば、茲の御文を讀み上げ給ふ時、左もありしならんと想像さるるのであります。

さて筋を辿れば實に斯くの如き因縁のある横川である。猶ほ全體此の横川なる處が、先き言ふ如く茲を開かれたが慈覺大師で、其の慈覺大師は入唐して五臺山より始めて念佛の法を傳へられたのが慈覺大師である。名高き叡山の根本中堂の前に、山門がありて文珠樓院と稱し、慈覺大師が五臺山より歸りて茲に文珠の像を安置し、茲で念佛の常行三昧を初められたといふのである。斯く横川なる處が、全體初めから理屈を言ふよりも、修行を先きにする傾きのあつた處である。『御傳鈔』に

楞嚴横川の餘流を湛えて、ふかく四教圓融の義にあきらかなり。

とあるを見ても此の横川が、法然聖人親鸞聖人の他力信仰を醸し出した處であります。

八 黒谷

さて斯く源信和尚の墓に詣うて、夫れより谷を出て、山路に艱難しつゝ、途中の景色を眺め、黒谷に参つたのである。黒谷は御存知の如く、法然聖人が四十三歳の時迄に、一切經を五度迄讀まれ遂に最後に善導大師の『散善義』の文を見て安心せられたといふが、黒谷の報恩藏に於てある。京都鹿ヶ谷なる黒谷は、後に出来たものであるさうであります。丁度横川と谷一つ隔てた處にある。茲は又幽邃静寂の境にて、淨土門としては、偲ぶ事多いのであります。今いふ如く、法然聖人は茲で善導大師の一心專念の文を見て、初めて淨土門の基を開くといふ故、多年一心專念の話をさせて貰うて居る私としては、大に昔忍ばれた次第であります。

九 根本中堂、其他

猶ほ横川より山脈の馬背を傳うて、根本中堂を始め、叡山の諸堂に参詣したのであります。根本中堂に参詣しては、今こそは徒らに漫然諸人の参詣するに任かせてあるが、其の昔は一山の根本中堂として、如何に森嚴なりしかを、座ろに思ひ出たのであります。而も其の本尊藥師如來のみ前に於て、親鸞聖人が智識を求められた昔を回想し、感慨無量であつたのであります。而して最も神聖に感じたは、傳教大師の御廟、淨土院の有様であつた。苔蒸したる御廟の左右には、今に沙羅雙樹が寂しげに昔の有様を遺して居る。是れ亦聖人が『和讃』に『山家の傳教大師は』とのたまひ、又『教行信證』にも、大師の『未法灯明記』を引用せられてある如き、此の山に生長せられたる聖人としては、無理ならぬ事が感ぜられ、我々は

聖人の言葉を通じて、却つて傳教大師を偲び奉る次第であります。

一〇 無動寺大乗院

猶ほ最後に、最も叡山の南端なる無動寺谷に至り、大乗院に参詣したのである。實に私共聖人の御蹟とあれば、一草一木、一芥の土砂と雖、追慕の情止みが難きを覺ゆるのであります。殊に此の所が聖人の御一代中に於て最も大變化のあつた時代——即ち聖人の求道時代より、六角堂参詣、吉水御入室に至る迄の間御住居なされた御舊蹟と思へば、一入懷はしき限りなく感じたのである。堂より下を望めば、幽谷深林眼下に堆く、又江州琵琶の湖水は茲より一眸の間に見うるのである。此の山此の水、嘗つては聖人の御窓に聚りし事を思へば、さから一々昔を語つてゐるやうにあつたのである。昔から名高き蕎麥喰ひの木像を始め、色々の寶物の開帳を拜觀したのであるが、之等につきては餘り感服は仕なかつた。有體に言へば、寧ろ俗氣紛々として、寧ろ聖人の昔を偲ぶ妨げとなつたやうにも感じたのである。全體何處でも現時の眞宗氣風の入りに込めてある御舊蹟は、何うも他宗ながらの御舊蹟よりも却て俗化甚しく、我々最負目よりも見てすら、感服が出来兼ねるのである。これは人の事でなく、御同様に大に注意せねばならぬ事と思うたのであります。猶ほ今年には日野法界寺にも詣うて、聖人誕生の昔を忍ばせて貰ひ、日野家の墓所なども拜みたのである。殊に國寶になり居る阿彌陀堂及び佛像、及び有名な天人の壁畫を拜して、聖人御幼少の時、此の邊をかしこに遊び給ひし餘を、想はせて貰うた事であります。

講 義

歎 異 鈔

近 角 常 觀

第十三章

一。彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をおそれざるは、また本願はこりとして往生かなふべからずといふこと。この條本願をうたがふ善惡の宿業をこころえざるなり。よきこころのおこるも、宿業のよきはすゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のよからずゆへなり。故聖人のおほせには、卵毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓房は、わがいふことを信ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらうと。まうしさふらひしかば、さらばわがいはんこと、たがふまじきかと、かされておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしとおほえさふらふと、まうしてさふらひしかば、さては親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにこころ、こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこころのよくてころさぬにはあらず、また害せじとおもふとも、百人千人をころすこととおもひ、おほせのさふらひしは、われらがこころのよきなげよしとおもひ、あしきことをあしとおもひて、本願の不思議にてたすけた

まふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこころの、惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひてやう／＼にあしきまなることのきこえさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて、惡をこのむべからずとこそおほせされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく惡は往生のさばりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も本願にあひたてまつりてこそげにほこられさふらへ。さればとて身にそなへざらん惡業は、よくつくられさふらひじものを、また、うみかばに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにし／＼をかり、鳥をとりにて、いのちをたぐともがらも、あきなきをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなりと、さるべき業縁のよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうにおもひ、あるひは道場へ、はりふみをして、なんなんのこと、したらんものをば、道場へいるべからずなどといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめしてうちには虚假をいだけるものか、願にはこりて、つくらんつも、宿業のよほすゆへなり。さればよきことも、あしきことも、業報にましまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信鈔にも、彌陀いかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすくはれたしとおもふべきとさふらふぞかし、本願にはこころのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しゆべきことにてさふらへ、おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にはこころおひなくてよかるべきに、煩惱を斷じなばすなはち佛になるとならば、佛のためには、五劫思惟の願、その餘なくやまします。本願はこりとしましめらるゝひと／＼も、煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれば、それは願にはこらるゝにあらずや。いかなる惡を本願はこりといふ。いかなる惡かはこらぬにてさふらふべきや。かへりてこころをさなきことが。

唯圓坊の傳

歎異鈔が唯圓坊の筆に成る事、卷頭及び十三章の終に先師と呼びたるは如信上人である事は、既に從來詳論したとてある。即ち要するに歎異鈔は如信上人の滅後に生き残りたる唯圓坊が、如信上人の傳の正意を失はんとを恐れ、露命わづかに枯草の身にかゝりて居る間は、如信上人と同時に聴聞したる聖人直々の御教化を語すとが出来るも、閉眼の後には定めてしどけなきことならんと慨歎の餘、血涙を揮ふて書き残されたる書である、既に内容が如信上人の傳の眞信を書きたるものなれば、古來之を如信上人の作として傳ふことは唯圓坊としては頗る満足なることであらう、即ち九章なり十三章なり唯圓坊の話を如信上人が傳へられたこととなつてあつたのである、されど事實としては九章十三章の文勢として、又文典としても、念佛まうしふらへども踊躍歡喜のこゝろあるそかにさふらふこと、又いそぎ淨土へまゐりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにて、さふらふやらんとまうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯圓坊あなじこゝろにてありけりといひ、また唯圓坊わがいふことを信ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしさふらひしかば乃至つゝしんで領狀まうしてさふらひしかば乃至一人もこの身の器量にてはころしつべしとおほえすさふらふとまうしてさふらひしかば云々と、一人稱の筆を用ゐる己上は唯圓坊の筆と斷ぜざるを得ぬ次第である。然るに古來此鈔を唯圓坊の作と見るときは此鈔は如信上人

と無關係といふ様に考へられてあつたが、今先師が如信上人の事と考ふるときは、内容は如信上人の傳の眞信となつて、筆は唯圓坊といふことになるから、猶一層奥ゆかしく感ずる次第である。何んとなれば最須敬重繪詞にある如く「あながちに修學をたしなまされは、ひろく經典をうかはずといへども、出要をもとむるこゝろさしあさからざるゆへに一すちに聖人の教示を信仰する外に他事なし」とある如信上人としては、歎異鈔の英氣才力煥發せる筆致はふさはしからぬのである。歎異鈔ありて我等は實に教行信證の眞意も感得せらるゝ眞宗無二の寶鑑と仰く次第であるが、又親鸞聖人の言語文字溫潤含蓄玉の如きに比較して見るに、歎異鈔は恰も孟子の論語に對するが如くである。意到り筆隨ひ快刀亂麻を斷ち、說破余蘊なき感がある、流石に辯說鴻才の譽ある唯圓坊の面目躍如たるものがある、此の如く聖人を孔夫子に比較し、唯圓坊を孟子と比較するならば如信上人は顔淵の如しとても言ふべき人格である、さすれば、自然覺如上人は子思とても言はねばならぬことになる。ともかく、如信上人が自から筆をとりてかゝれたる書はなくして、同時に聞きつゝあつた唯圓坊が其上人の傳の眞信を書きたといふことは如何にも味深きことである、而して唯圓坊は恰も孟子が揚墨を排して路を開けるが如く、頗る銳利なる鋒鏑を露はして異義の胸臆を貫ぬかずんは思ふといふ點が特色である。そして、かくの如き年長の唯圓坊が年若き御孫の如信上人を先師と呼び、有縁の知識と仰ぎつゝ、上人口傳の眞信を闡揚せられたる點が、如何にも奥ゆかしく尊き點である。

此に於て明らかに聖人滅後に於ける原始眞宗の面影があらはれてある、如信上人を中心として、遺弟が有縁の智識と仰ぎたる様子が分かる、先師といふ稱呼が當時如何に用ゐられあつたかといふことに注意して見ると、當時眞宗の原始的教團の有様が坐ろに偲ぶことが出来る、今師といふ語がある、其今師が入寂せらるゝときは先師といふた様である、恰も今上皇帝が崩御せらるゝときは先帝といふが如くである、『最須敬重繪詞』に京都には一人の尊宿まします、勘解由小路中納言法印坊宗昭これなり、當流傳來の譜系をば今師よりうけ、親鸞聖人遺跡をば先考よりつたへたまへりとある、今師とは如信上人のことと先考とは尊慈尊宿のことである、そこで報恩講式文に

方今念佛修行之要義雖區他力眞宗興行、即起從今師、知識專修正行、繁昌亦成、自遺弟、念力、酌流尋本源、偏是祖師、德也

とある、今師の知識といふは、どうしても如信上人のことである、而して遺弟の念力とは、唯圓坊初め後年二十四輩とされる人々のことであらう、初めに方今と書きて、後に偏是祖師德也とあれば、此式文製作の時中心として聖人の遺弟が渴仰せる如信上人のことを今師の知識と云はれたのであらう、覺如上人は法然上人のことを曾祖師といひ、親鸞聖人を祖師といひ、如信上人存命中は今師といひ、遷化の後には先師と言はれたらしい、口傳鈔改邪鈔の本文及び奥書などによりて分かる、今如信上人よりも生き永らへたる唯圓坊矢張如信上人のことを歎異鈔の卷頭に先師口傳の眞信といひ、有縁の智

識といふたものである、其如信上人が遷化されたものゆへ唯圓坊親鸞聖人御物語の趣耳の底に留る所を記憶より呼び起して、凡そ御滅後四十年も後に書かれたのである、いかに唯圓坊が如信上人を輔け、法燈を擁護せんとする赤誠があらはれてある。

一昨年親鸞聖人六百五十回の歳、唯圓坊の舊跡たる河和田村の田園中の道場の池の畔に石碑が建てられた、回顧せば其前年我等同朋數人如信上人の御詳月に金澤の法龍寺に於ける同上人の御墓に参りたる際、河和田報佛寺に詣て、荒蕪せる道場池を訪ふて、唯圓坊の昔を偲びたことであつた、其後御遺忌のために御舊蹟参詣者が之を訪ふものゆへ、駐在所の巡查が戸毎に説きまはつて、立派な石碑が出来ることになつて、其撰文を私に囑せられた、不思議なる自然の御因縁である。其中に唯圓坊の傳につきて研究したる結果を盡しておきた、實に其文は左の如くである。

慧日院大谷勝信師題額。

河和田唯圓大德、我宗祖親鸞聖人上足之弟子也。以鴻才辯說、有名。歷事如信覺如兩宗主。闡明宗意、殊詳安心、旨趣。初如信上人、侍聖人之日、大德述疑端、受聖人之慈誨。事詳于歎異鈔。世傳此鈔或係大德筆。蓋信上人滅後、異義競起。於是大德忘老、顯上人口傳眞信、傳有縁智識之教者歟。延慶元年冬、大德上洛、謁覺如上人、對善惡

二業之間、且述「自他之事」見「千幕歸繪詞」有「唯善」者、亦師「事大德」或云、大德、善之異母兄也。善初名弘雅、號大納言阿闍梨、小野宮少將入道具親之孫、少將阿闍梨禪念房之子、而仁和寺相應坊守助僧正弟子也。隱遁住「河和田」有「妻子」家甚貧。正安元年、覺慧師令「善」上洛、住「大谷南房」。事出「千存覺上人」一期記。由「是觀」之、大德、聖人滅後擁護法燈之輔弼、闡邪顯正之干城也。今此池、大德所住道場之舊墟也。名「道場池」、又心字池。俗傳、大部卿平太郎、弟有「平次郎者」、性暴戾、由「妻」因緣「深歸」聖人、名「唯圓」。聖人亦來「于此」說法云。文明十三年城主春秋朝勝、令「第十世實了移」竹内、號「泉溪寺」。春秋氏滅、子孫歸俗。元祿二年、德川光圀見「什寶」、令「第十五世性圓再興寺」。明年更名「報佛寺」。尋移「春秋氏城墟內城之地」。十六年本堂成。爾來相繼至「第二十三世法弘」。今年當「宗祖聖人六百五十回遠忌辰」。里人深慨「遺跡之荒蕪」、皆謀啓「荆榛」、浚池植樹、頗復「舊觀」。且建「石刻」文、傳「千後世」、其志可「隨喜」也。現宗主彰如上人嘗論曰、欲「知」眞諦門奧義、須「讀」款異鈔。欲「守」俗諦門軌範、須「繙」蓮如上人御一代記開書。

方今信仰復興、求道之人無「不知」款異鈔者。然則可謂「大德之念力、千載不磨也」。庶幾四海兄弟、獲「得同一信心」以協「念佛成佛是真宗之祖意」矣。

明治四十四年辛亥祖忌後第五日

後學 近角常觀識

北條時雨書

此石碑は昨年の春落成して、亦我同朋諸兄姉と共に其式に詣てたことである、此撰文の内容につきては、次回に詳細に叙述して、原始時代の眞宗と、之に於ける唯圓坊の位置とを研究しやうと思ふ。



▲井上圓了博士序

▲三重縣師範 柴原砂次部先生著
學校教諭

系統的論語講話

クロース上製
本文四百十頁
定價壹圓貳拾錢
送料 八錢

模範的論語講話!!

世、論語に關する著書多しと雖、悉く斷片的註解のみにして、眞に之が眞髓を發揮したるものを見ず、著者子弟の薰陶に従事する傍ら、論語の研究に心を潜むること十數年、古來學者未だ曾て道破せざる所を論及し、一章一句の裡前後一貫せる系統を摘發し、組織的新解釋を試みたるものにして、天下萬人の望んで得られざりし模範的論語講話初めて世に出でたるなり。而も講述平易にして親切、東洋道德の典型たる論語、本書により益其眞價を傳ふるを得ん哉。切に一讀をすむ。

國民新聞曰く

纂意に於いて論語編纂の旨趣を述べて各章文意の連絡を明かにし大意に於て各章文意の大要を解説し更に字解に於て講義の講義たる所以を完全に果たして居る斷片的章句の裏面に一貫した系統を尋ね組織的解釋を試みた點は本書の特色として擧ぐべきである。

發行所

東京小石川林町七十
振替東京八二六四

新修養社

近角常觀著

訂正 補增 信何之餘瀝 定價 卅錢 稅 卅錢 郵 卅錢 油 卅錢 參 卅錢 版貳拾第

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈岳の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔懺謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て明ならん。

懺悔錄 附錄『歎異抄』

第八版 定價二十錢 郵稅四錢 袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の真髓、惡人救濟の真意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後、佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頃に一掃せる感謝の實感とを最も真率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實験を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人とも如來慈光の下唯救済の一途ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず

(懺悔錄久しく品切れの處今回第八版出來せり)

人生之信節

◎第一章 人生問題と信仰 ◎第二章 悲觀思想と信仰 ◎第三章 倫理力行と信仰 ◎第四章 犯罪心理と信仰 ◎第五章 社會問題と信仰 ◎第六章 國家秩序と信仰 ◎第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

發賣所 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六九六番 求道發行所

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰

版 貳
夕 郵 定
口 稅 價
一 七
ス 八 十
綴 錢 錢

冠頭
唯唯
信
鈔信
文
意鈔

初版
定價七錢
郵稅二冊迄二錢
施本用小冊子

頭冠
歎
異
鈔

版六
施郵定
本稅三價
用小冊迄五
冊二錢錢
子錢錢

信仰之餘瀝要略

版三
施郵定
本稅價
用四冊
小迄五
冊二錢
子錢錢

施●本●用●小●冊●子●は●部●數●に●應●じ●充●分●割●引●す●

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申
込
所

東京市本郷區森川町一
撥替東京一六六九六番

求道發行所

規定

本誌は毎月一回三十日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、
郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川
町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發
行所」とせらるべし
本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべ
く、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

[illegible]

大正二年十月七日印刷
大正二年十月十日發行

發行兼編輯人 近角 常觀
印刷人 白土 幸力

發行所 求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所	東京市神田區 同 京橋區 大阪市	東京堂 北隆館 德永趣西文庫
------	------------------------	----------------------

前號要目

求道

●眞の信仰、假の信仰

講義

●『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第九席

信樂釋(現生正定聚)

告白

●不可思議善巧方便

大原達道

●病床大威神力を信知し奉りて

出村銚逸

●恩徳廣大不思議なり

林和輔

●十年の開法さては皆な虚戯に

屬せし乎

澁谷淳藏

●私一人のための御苦勞

堤みゆき

時報

●第三回夏季求道會